

---

Alice story **本当のアリスは誰？**

ダイヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Alice story 本当のアリスは誰？

### 【Nコード】

N2994X

### 【作者名】

ダイヤ

### 【あらすじ】

「君はアリスじゃないなら、何？」白ウサギの一言が、突き刺さった。俺の名前は、なんだ？ 『ワカラナイ』 自分の居場所がほしかった。ただ、それだけ。それだけで、俺はここにやって来た。彼は本当のアリスだろうか。彼の居場所は存在するのだろうか。彼は何なのだろうか。

Where is the next Alice? 次のアリスはどこ？

Welcome, Alice!!!

\* \* \* \* \*

不思議の国<sup>ワンダーランド</sup>は、アリスを待っている

アリスがいないと物語が進まない

1 番目のアリスも、2 番目のアリスも、3 番番目のアリスも、4 番目のアリスも5 番目のアリスも . . .

みんな途中で死んでしまった

本当のアリスにしか物語は終わらせられない

では、次のアリスは、物語を終わらせる事が出来るのでしょうか？

物語が終わった時、不思議の国<sup>ワンダーランド</sup>は、アリスは

どうなってしまうのでしょうか？

そもそも

物語の始まりとは、終わりとは

どこなのでしょう？

\* \* \* \* \*

「お呼びでしょうか。陛下。」

青年の声が響く。

大きな扉。高い天井。並ぶ兵士達。跪く青年。そして、玉座に座る少女。

少女は優しく微笑み、青年に向かって口を開く。

「ええ。呼んだわ。帽子屋。」

「今日は一体なんのご用でしょうか？」

跪いたまま、青年…帽子屋は問う。陛下と呼んだ少女に向かって。

「白ウサギが動いたの。きっと、アリスが来たのよ。」

一呼吸置き、陛下は微笑みを消さず、帽子屋の前に歩み寄った。そして、帽子屋の顎をくいと持ち上げ、囁くように耳元で呟く。

「だから、アリスを」。。

言い終わると、陛下は帽子屋から離れて玉座に座った。

「承知しました。我が主。ハートの女王。」

\* \* \* \* \*

「何なんだか、この馬鹿騒ぎは。」

人が混み合い、そして賑わっている。

そんな人の集まりの中、青年はいた。

耳に掛かる程度のお金髪。淡い、青色の瞳。格好は、白いワイシャツ。ワイシャツの上には、黒いジャケット。下はジャケットと、セツトとなっている長ズボン。なぜか、青年は異様に目立っている。

誰一人として、青年を睨み付けている訳でも、見続けている訳でもない。ただ、青年は『何か』に見られている。誰も気づかないような、何か。

ここに、俺の居場所。あんのかな。

青年は、人混みを避けながら歩いている。と

グイッ

「!!!?」

突然腕を掴まれ、引っ張られていく。人混みを抜け、人が少ない通りへと引っ張り出された。

「人混みにいると、迷っちゃっうよ?」

笑顔。青年を引っ張り出した、張本人である少女は探していた物

でも見つかったと言うかのような笑顔。

首に付く程度で、垂れ下がった白い銀髪。黄金色の瞳。幼さ残る顔立ちだ。格好は、白いジャケット。黒いワイシャツ。下は黒いショートパンツ。ショートパンツには、レイピアが垂れ下がっていた。ここまででは、普通と言っても、まあ。通るだろう。でも、少女には変わっている事があった。美しい銀髪には、白いウサギの耳が立っている。偽者には見えない。不自然は無く、自然と少女の頭から生えている。

だが、そんな事は青年にとってどうでもよく、最初に出てくる言葉は、

「誰だよ、あんた。」

「僕は白ウサギさ」

少女：白ウサギは青年の片手を取り、言葉の続きを言い放つ。

「不思議の国へようこそ。アリス」

- アリス -

白ウサギの言葉に反応し、手を振り払う青年。強く白ウサギを睨みつける。その様子が、不思議だと言わんだかりに白ウサギは首を傾げた。ウサギの耳が揺れる。

「俺はアリスなんて名前じゃない。」

目を丸くし、白ウサギは青年に顔を近づける。一瞬、退いた青年だったが、白ウサギはそれを許さないとばかりに顔をさらに近づけてきた。

「君はアリスじゃないなら、何？」

黄金色の白ウサギの瞳に、青年の姿が映る。

俺の、名前？

名前？

俺の名前は・・・

俺の・・・名前・・・

俺の、名前はなんだ？

Where is the next Alice? 次のアリスはどこ? (後

アリスが好きなのでアリス系を書いてみました!  
はい!

下手くそですね!話めちゃめちゃですね!  
すみません。

アドバイス・感想をくれると、飛び跳ねて喜んじゃいます!  
これからは、一週間で、最低一回は投稿するように頑張ります!  
ここまで読んでくださった方。

ありがとうございました!

こんにちは！作者です！

これから、このスペースに、前回のあらすじみたいなのを書かせて頂きます！

もしかしたら、途中からあらすじではなく、キャラクターたちの会話になったりするかも・・・？

そこらへんは、見てくださっている皆様によります。と言っても、自分勝手に初めてしまいかもしれません；；；

すみません。そこは、ご了承ください。

では、あらすじですね！

主人公（名前不明）は、不思議の国へ来て、白ウサギに出会いました。

白ウサギは主人公を『アリス』と呼ぶ。主人公は自分はアリスじゃないと否定するが、白ウサギに『君はアリスじゃ無いなら、何？』と言われてしまう。

アリスでは無いなら？自分は何だ？

白ウサギの言葉を否定しようにも、自分の名前が判らない。自分が何なのかも判らない。

俺の、名前はなんだ・・・？

こんな感じでいいんでしょうか？あらすじはもっとうしろの方がいい。などのアドバイスをくださると、嬉しいです！

はい。

長々（？）とすみません。ちゃっちゃっと話かけえ！！とか、思われていそうです・・・

では、この辺で、作者のどうでもいいあらすじは終わりです。

失礼しました。



「俺、は・・・」

言葉に詰まった青年を無視し、白ウサギは何、と続ける。  
言葉を噛み締め、青年は俯く。

産まれた時に、貰ったものじゃないのか？

でも、名前を、俺は・・・

沈黙が続く、青年の額からは汗が流れた。すると、白ウサギが少女らしく、クスツと小さく笑った。顔を青年から遠ざけ、笑顔で青年を見つめる。

意味がわからない青年は、首を傾げた。

「やっぱり。君はアリスだね。」

俺はアリスでは無いと、もう否定は出来ない。だから、青年は自分が多分アリスだと言う事にしておいた。

「ああ・・・。判った。俺は、多分アリスだ。それで、いいだろ？」

「うん、別にいいよ。」

あっさりと了解し、白ウサギはくるりと一回転して見せた。抑えきれない喜びを、さらけ出すかのように。

「じゃあ、アリスの行きたい場所へ連れてってあげる。僕は、案内役だからね」

「俺の行きたい場所、ねえ。」

初めて来た場所で、行きたい場所も何も、判らない。ここが、どこなのかも判っていないのだから。

悩み始めたアリスの様子を楽しむかのように、白ウサギはニコニコと笑っている。と

「お前の役目はそこまでだろう？白ウサギ」

黒く、艶のある拳銃が、白ウサギの頭に突き付けられた。

「っ！？」

自分がやられている訳では無いが、さすがに目の前で拳銃を突き付けられている奴がいれば、動揺する事だろう。アリスは、動揺していた。

それでも、白ウサギは動揺せずに、顔だけを動かして拳銃を突き付けた人物を笑顔で見た。

耳に掛かる程度で、うねうねと癖が付いた黒髪。鋭く光る銀色の瞳。顔立ちと背丈で、アリスより年上なのが判る。だが、まだおじさんと言う訳ではなさそうだ。20代半ばと言ったところだろう。格好は、全身黒いスーツと言うシンプルな服。そして、黒いシルクハット。全体的に怪しい雰囲気だが、ここでは不思議ではない。

「こんにちは。」

「アリスを渡せ。これは、女王命令だ。」

「そっか。それは、残念。ごめんね、アリス。僕は、女王様に嫌われてるんだ。だから、一緒に行けないの。帽子屋さんと一緒に女王様のところに行つてね」

拳銃を突き付けていた張本人の青年は、拳銃をしまい、強く白ウサギを睨み付けた。

「それじゃあ、またね。アリス」

白ウサギはアリスに手を振って大きく跳躍をし、家の屋根の上に飛び乗った。そして、もう一度笑顔を見せ、屋根から屋根へと跳躍しながら去って行った。

そんな白ウサギに向かって苛立ちを隠さず、帽子屋は見えなくなるまで睨み付けていた。

「あんた、誰だよ。」

「さつき白ウサギが言っただろ？帽子屋だ。俺は、お前を女王の下へ連れて行く。それが、女王命令だからな」

「はあ！？なんで、俺が連れて行かれなきゃなんねーんだよ」

青年…帽子屋は舌打ちをした。

「俺に質問をするな。黙って付いて来い。もし、お前が抵抗すると言っなら、無理矢理にでも連れて行く。それだけだ。」

帽子屋は、自分の言いたい事だけ言うと、さっさと歩き始めた。先ほどの言葉は恐らく脅しなどでは無いだろう。なぜか、そう思ったアリスは黙って帽子屋に付いて行く事にした。

\* \* \* \* \*

『アリス・・・』

『早く、早く』

『<sup>むか</sup>迎えに来て……』

『私を、早く助けて……』

『じゃないと』

『  
』

『アリス……』

\* \* \* \* \*

「チエシャ猫。いいの？」

「何が？」

森林の中。チエシャ猫と呼ばれた少年に近い青年と、少年がいた。

「ご主人様のところに行かなくて」

「いいんだよ。俺は、自由に生きたいから」

リンツ

鈴の音が鳴った。か細い鈴の音が。

それに合わせる様に、チエシャ猫はニヤリと笑う。

「それに、アリスも来たしね。これほど面白い事は無いよ。」

「アリスをいじめるのもほどほどにな。何十人お前の、いじめでアリスが死んだ事か。」

少年は、呆れたように肩を竦<sup>すく</sup>める。

「知るかよ。そんなもん、前のアリスが弱かったただけだろ？それに、

一呼吸置き、口を開く。

「アリスをいじめるのは、楽しくてたまらない」

な、何か一話目に比べて、さらに下手くそになってしまった!？  
とか、かいている内に思いました。

だ、大丈夫ですかね???

内心、かなり焦っています……。

えーっと、感想・アドバイス大募集!

どんな事でもオツケーです!とにかく感想・アドバイスをください!

な、何か宣伝みたいですね……

前書きに続き、作者のおかしな言葉ですいません。

では、この辺で失礼します。

Command from the Queen 女王からの命令(前書き)

こんにちは！

やっと3話目突入ですw

亀以上にとろい。とか、思ってる方。すみません。

なるべく、早く書きます！

では、あらすじです。

主人公は、自分をアリスだと言う事にした。自分には、アリス以外の名が無いから。(小説に書いていない事が入ってるよ!)そして、帽子屋と言う男が現れアリスは帽子屋と共にどこか、へ向かう事になる。アリスが向かう場所とは？

はい！アリスが向かう場所なんて、予想がつく人は付きますねw  
すみません。

では、この辺で失礼します。

Command from the Queen 女王からの命令

「なあ、俺達はどこに向かっているんだ？」

「俺に質問をするなど言っただはすだが」

ムカつく奴だな、おい。

アリスは帽子屋ぼうしやに苛立ちいらだつつも、ちゃんと付いて行つた。

どこに行くかは判らない。だが、もしも抵抗ていこうすれば拳銃けんじゆうを向けてくるだろう。自然的に思った事だが、今は自分しか信じられない。

取り合えず、おとなしくしておいた方が良いでしょう。

「一つ聞くが、お前は自分の名前ぐらい名乗れるな？」

「はあ？んなの、当たり前だろ」

「ならいい」

なんなんだよ、こいつは……。

おかしな質問をしてきた帽子屋を不思議に思いながら、それを口にはせず、また黙って歩く。

どこか、へ。

\* \* \* \* \*

アリスが連れてこられた場所。それは、

城、だった。

高い天井。飾られた壁。長い道にしかれたレッドカーペット。その先には、祭壇のように少し階段となつて上がっている。そこに、赤い皮の玉座が一つ。さらに後ろの壁は大きな窓となっている。全体的に見て、まさに城の一部。

「始めに名前を聞かせてもらいましょう。」

玉座。そこには、少女が座っている。その横には、軍服を着た青年がきおつけをして立っていた。見た限りでは、護衛だろう。

肩にぎりぎり付かない程度のふんわりと雲のように内側にはねた黒髪。薄い赤色の瞳。顔立ちから見ても、可愛らしい人形のような少女。格好は赤いドレス。ドレスの裾は赤と黒のダイヤ柄。半袖の提灯袖は、黒色。手には黒いレースの手袋をしている。頭にはちょこんと、小さな王冠。全体的に派手で、豪華な格好だ。

女王様、ねえ。こんな子供が。

内心では、目の前に座る少女が女王だとは信じがたい。  
アリスは、帽子屋に連れてこられ、不思議の国の女王の前にひざまずいている。

「……。アリス、です」

仕方なく答え、アリスは女王を疑わしげに見つめる。

「始めまして、アリス。私は不思議の国の女王。ワンダーランドハートの女王。それでは、本題に入りましょう」

優しい笑顔でアリスを見つめ、口を開く。

「アリス。私は、貴方に物語の不純物を殺してほしい。」  
「は？不純物？殺す？。」

ぴんとこない。物語の不純物。それは、何の事だろうか。  
跪ひざまずいたまま、アリスは色々考えるが、答えは出ない。

「黒ウサギ。それが、不思議の国の不純物。物語が進まない理由わけ。  
それを、アリスに取り除いてほしいの。いえ。アリスにしか頼め  
ないの。不思議の国では、勝手に人は殺せない。アリスを除いて。だ  
から。」「ちよっ！待て！」

ハートの女王の隣となりにいた護衛が強くアリスを睨み付ける。  
いつの間にか片手は腰に垂れている剣の柄えにあった。今にも剣を  
抜いて、襲い掛かってきそつだ。

「ダイヤ。アリスが怯えているわ。」

無言で護衛は剣の柄えから手を離し、きおつけの姿勢に戻った。

「俺にしか殺せない？どう言う意味……ですか。」  
「不思議の国ワンダーランドは、一つの物語。物語は決まった道を歩かなくてはい  
けない。だから、自分の役目を無視して勝手に人を殺す事は出来な  
い。だから、アリスだけしか殺せない。アリスがその役目を持って  
いるから。」

俺の、役目……？存在理由……？

俺はただ、この世界の不純物クロウサギを、殺すためにここへ来たって言う  
のか……？

この手を汚す為に、存在しているのか・・・？

違う。

俺、は・・・

俺は                    !!!

無我夢中むがむぢゅうだった。

アリスは感情的になって、自分が何をしているのか判らなくなっ  
た。

気づけばハートの女王の首を両手で掴んでいた。そして、ダイヤ  
には刃を首に突き付けられている。

「アリス。貴方の思っている事を話して？」

ハートの女王は首を掴まれているにも関わらず、微笑みを消さず  
にアリスの頬を撫でた。

「俺、は・・・。」

手の力が弱まり、その場に膝ひざを付く。ダイヤは剣を収め、仁王立  
ちの状態に戻った。

「アリスから見れば、これは私達の自分勝手な考えね。でも、ここ  
にはアリスの欲するものがあるわ。それを手に入れたいと願うなら、  
黒ウサギを殺すしか方法は無いのよ。」

俺の、欲するもの・・・？

俺は                    ・・・

冷静を取り戻し、アリスはハートの女王の前にひざまず跪いた。

「判りました。女王に従います……。」

俺の欲するものは

絶対の居場所

Command from the Queen 女王からの命令（後書き）

もう、取り返しが付かないぐらい下手くそになっていると密かに思っています。

大丈夫かどうか不安です……。

でも、これからも書きます！誰も見ていなくても！

はい。変な事を書きました。すいません。

では、失礼します。

遅れました！あーだ、こーだ、パソコンがああああ！！！！  
と、なりまして・・・すみません><

あらずじ

アリスは、女王の命令を聞く事になり、不純物<sup>クロウサギ</sup>を殺す事になった。  
自分の絶対の居場所を手に入れるため。アリスは黒ウサギを殺す。  
そう、決めた。自分に言い聞かせ、アリスは黒ウサギを殺しに向か  
う・・・。

ねえ、アリス。

可愛いアリス。

愛おしいアリス。

私だけのアリス。

ねえ・・・

名前を頂戴？

『アリス。こっちへいらっしやい』

誰かが俺に、話しかけてきた。俺は、コイツを知っている。そう、こいつは・・・

『姉さん・・・？』

『ふふっ。どうしたの、アリス？こっちへいらっしやい』

自然と、体が動く。どうして？なんで？俺に疑問は生まれなかつ

た。ただ、無意識の内に、姉さんに手を握られていた。

暖かい……。

『ねえ、アリス。先生が何を言っていたか覚えてる？』

『先生、が？』

『そう。先生は、奪い合いはよくないと言っていたのよ』

『奪い合い？何を？』

『……名前よ』

『名、前……？』

姉さん。何を言いたいんだ。

聞きたい。でも、聞きたくない。

聞いたら、俺の中の何かが壊れてしまいそうで……。

『アリス』

『っ！？』

突然、姉さんの手が、俺の手から首へと移動した。俺は、首を絞められている。

苦しい。痛い。どうして、こんな事をするんだ？

姉さん、姉さん、答えてくれ……。

『ねえねえ！アリスっ』

『姉、さ、ん……。や、めっ……。』

『貴方の名前は本当にアリス？違うわよねっ！だってアリスは私だもの！貴方なんかじゃないのよっ！』

手に、力が込められる。

もう、声が出なかった……。



時な訳ねーし！」

窓から見えた、外の景色は夜の色。夜では無いかもしれないが、少なくとも夜明け前。6時はおかし過ぎる。

「俺の時間はいつでも6時だ。ほら、早く行くぞ」

「どこにだよ。女王のとこなんて言うなよ」

「黒ウサギを殺すんだろ？その為には、相手を探し出すだろ。このアホ」

「俺はアホじゃねえ！」

アホと言う事に反論しつつも、頭を回転させる。

探し出す？どうやって？ってか、黒ウサギの居場所判ってなかったのか……。ま、当たり前か。

「で、その黒ウサギの居場所を探し出す為にどこに行くって？」

「芋虫の所だ」

・  
・  
・  
・  
・  
・

暗い街は、とても不気味だ。

ワンダーランド  
不思議の国ならば、なお更、不気味。

昼間は馬鹿みたいに騒いでいたと言っのに、今は何の声もしない。聞こえてくるのは、叩きつける様な風の音。

昼と夜で違いが凄すぎる。

相変わらず、おかしな国。

「あ、アリスと帽子屋さん」

そして、なぜか少女、白ウサギと出会ってしまっ。

なんだ、これは・・・悪夢か？

白いウサギ耳が揺れる。何とも可愛らしい光景ではあるが、アリスにとっては興味が無い。帽子屋さんにとっては・・・うざい。

「どうしたの？こんな夜明け前に。あ、芋虫さんの所いくの？」

「五月蠅い、黙れ。チエシヤ猫と三月ウサギの所へ行け」

「ひどいなあ。別に、いつもチエシヤ猫と三月ウサギのところに居る訳じゃ無いんだよ？それに、今はアリスがいるし・・・。アリスのそこの方が楽しいじゃん」

そりゃ、どうも。

白ウサギに言われても嬉しくは無い。決して嬉しくは無い。

「来るな。うざい。どこかへ行け」

「それは、帽子屋さんが決める事じゃ無いからね？あくまで、アリスが決める事だよ？」

「チツ・・・」

大きく舌打ちをした後、帽子屋は睨み付けるようにアリスを見やる。・・・どうやら、一緒に来るなと言えと言いたいのだろう。

帽子屋の好きにさせるもの嫌だな・・・。

「白ウサギ自身が決めれば、いい」

「やった」

「こんの・・・アホが・・・！」

帽子屋から殺気が出まくりなのは、気にせず勝ち誇った笑みでアリスは帽子屋を見やる。帽子屋は本気で睨み付けている。・・・よほど白ウサギの事が嫌いなのだろう。

言った、はいいが・・・。こいつ等と一緒に大丈夫、か？

後悔が少し混じりつつも、アリスは気にし無い事にした。

ここでは、気にしていたら負けだろう、と言い聞かせながら。

バアンツ！

静かな夜。銃声が、響き渡った。

「そんなに怒らないでよ、帽子屋さん」

「クソウサギがっ」

「アハハハハハハっ」

「いい加減やめろってんだ！！！」

芋虫の居場所へと向かい始めてからおおよそ30分。白ウサギと帽子屋はすぐに喧嘩を始めた。喧嘩のきっかけは、白ウサギが「帽子屋さんってアリスの事が好きなの？」と言う一言だった。・・・吐き気がする言葉だ。

当然、帽子屋の怒りは爆発し、今となっている。

こっちの身にもなれってんだ・・・！

自分自身の中で湧き上がってくる怒りを抑えながら、取り合えず喧嘩を止めようとするアリス。

「こんな調子じゃ芋虫のところに行けねーだろ！？」

「だってさあ、帽子屋さんがあ」

「言い訳無しだ！帽子屋も少しぐらい我慢しろ！」

「チツ・・・」

取り合えず、納まった……か。

だが、帽子屋は不機嫌な顔だし、白ウサギは変わらずに笑顔。アリスは……後悔。

これから上手くやっていけるのか……？

……

木々が生い茂った森の前。アリス、他2名はいた。何の変哲も感じられない、森の前に。

「ちよっ……なんだ、ここ」

「どこって……勿論」

「「迷いの森」」

ああ、綺麗にハモったな。

まあ、それは帽子屋にとって最悪なものであって……

「クソウサギが」

超不機嫌だ。

思いつきり帽子屋はアリスを睨んでいる。……なんで、許可したんだとでも言いたそうだ。

アリスは目を逸らし、なるべく帽子屋を見無い事にした。

「あ……で、迷いの森ってどんなところだ？」

帽子屋の怒りからなるべく、避けるために必死に言葉を探した結果だ。

白ウサギは子供のように笑いながら・・・実際子供な気がするが、説明を始めた。

「迷いの森って言うのは、芋虫とかチエシヤ猫とか三月ウサギとかの寝床つてとこかな。森の全体を把握しているのはチエシヤ猫だけだから、多分チエシヤ猫に案内してもらわないと・・・一生出られないかもって言う森」

笑いながらも、さらりと恐ろしい事を言う奴だ。

取り合えず、チエシヤ猫がいなければ一生森の中に・・・と言うか死ぬ。

ヤバイんだな、うん。

「で、チエシヤ猫はどこにいるんだ？見つけないと、俺達芋虫に会えねえんだろ？」

「うん。一応知り合いだから、そこらへんは大丈夫だよ。あ、でも帽子屋さんがチエシヤ猫達の事嫌いなんだよね」

「黙れ」

相変わらず、不機嫌な帽子屋。

アリスの口からため息は自然と漏れた。大きなため息が。と、刹那

「へえ」。次のアリスは男か」

不意に声が聞こえた。

だが、周りに帽子屋、白ウサギ、アリス以外の気配は無い。本当に、声だけ。

アリスと帽子屋は厳しい表情になり、森を睨んだ。

「久しぶりだね、三月ウサギ」  
「ああ……。久しぶりだね、白ウサギ。チエシャ猫が待ってるよ。アリスを……。君達を。白ウサギなら場所、判ってるよね？じゃあ、俺は待ってるよ。チエシャ猫とね」

声は消えていった。気配は無かったのだが、なぜか消えたと判るような感覚が全身に過ぎった。

そして、なぜか白ウサギが珍しく難しい表情をしている。

悲しみ、怒り、苦しみ、そして……。憎しみが混ざった表情。どうして、なぜ？

なぜ、そんな顔ひんがしをする？

・  
・  
・  
・  
・

「三月ウサギ、ちゃんとやってくれた？」

ぺろりと赤い舌を出し、青年…チエシャ猫は笑みを浮かべてみせた。狂った笑みを。

その横で木に持たれかかる青年…三月ウサギはやれやれと呆れた表情をする。

「ああ。言われた通りにしたさ。これで、満足だろ？」

「ありがと。本当はお迎えに行っても良かったけどさ、やっぱりアリス達自身の足で来てほしいんだよね」

けらけらと笑うチエシャ猫の姿は、まるで壊れた人形。

壊れて

ネット  
人形。

狂って

壊れて

狂って

壊れて

狂って

もう、何も感じない  
操りマリオ

Invitation from Cheshire Cat くチエシヤ猫が

もう、駄目・・・です。眠いです。

馬鹿ですね。こんな時間に書く私。

自分で笑っちゃいますよ。

あ、それと会話文が多い・・・。自分で気付いていても、治せない  
ものなのです・・・。すみません。

では、眠いのでこの辺で。

Beginning of the game 〈ゲームの始まり〉(前書き)

あらすじ

芋虫のいる迷いの森。迷いの森は、チエシヤ猫しか全体を把握していない。その為に、チエシヤ猫に力を借りなければならなくなってしまう。だが、そこでチエシヤ猫からの招待があった。アリス、帽子屋、白ウサギの3人はチエシヤ猫の下へと向かった。

Beginning of the game (ゲームの始まり)

「あー……。ごめんね、アリス。突然変な事になっちゃった」

作り笑い。

白ウサギは無理に作り笑いをしている。

ドウシテ？

「嫌、別に……」

今の、白ウサギかぶに何と声を掛けて良いのか判らない。言葉が、見つかからない。

「……さつさと、行くぞ。馬鹿猫の所に」

「……うん」

あれ？帽子屋、今何か白ウサギを……。

「置いてくぞ、アリス」

「あ、ああ……」

迷いの森へと向かう2人を追いかける形で、アリスは森の中へと入っていった。

迷いの森へと……。

.....

昔誰かが教えてくれた。

『お前は、闇の中で生きていく』

どうして？

俺の質問に答える人間はいなかった。

判らない。

どうして他人に決められなくてはいけない？

どうして闇の中にいなくてはいけない？

どうして光の中にいられない？

『お前の存在が闇だ。闇そのものだ』

俺が、闇？

嘘だ。

だって

父さんは、笑って言った。

『お前は、明るい太陽のような子だ』

だって

母さんは、笑って言った。

『お前は、光のように温かいのよ』

誰か答えて。  
父さんと母さんは間違っていたの？  
それとも、

「最初から嘘の言葉だったの？」

ねえ、ねえ、ねえ

誰か答えて。

判らないんだ。

助けて。

教えて。

誰か。

誰でもいいから……。

教えてよ。

・  
・  
・  
・  
・  
・

夜の月が映し出された透き通った薄青色の泉。直径10mと言ったところだろうか。

そこにいたには、木の上で狂ったように笑う青年と、その下で呆れている青年。

薄紫の髪に金色の瞳。細身で筋肉質な体格。その体格がよく判る体にピッチリとフィットした黒い服を着ている。ノースリーブのT



「・・・何の真似だ。白ウサギ」

「ごめんね・・・」

「優しい帽子屋なら、きつと白ウサギを信頼してるって思ったよ。口では否定しても、ね」

大きく舌打ちをし、帽子屋は拳銃を降ろした。白ウサギを睨みながら。

白ウサギは悲しい顔をしたまま、レイピアを帽子屋の首に当て続けた。

「白ウサギ・・・お前・・・」

「僕、は・・・」

「チエシヤ猫。もう、白ウサギを苛めるのは止めたらどう？」

ずっと黙っていた青年が、口を開いた。

茶色の髪にオレンジ色の瞳。白いワイシャツにベージュのジャケット。下はジャケットと同じ、ベージュの長ズボン。はっきり言うと、地味な青年。それでも、青年には一っただけ地味では無い、茶色のウサギ耳がついていた。白ウサギに負けないなんとも可愛い耳。

「三月ウサギ・・・。チエツ、もう少しぐらい駄目？」

上目遣いで問いかける青年…チエシヤ猫。

普通の人間（女子ならなお更）ならおちるだろう。色々な意味で。

「駄目」

「ケチ」

「ケチで結構。さあ、白ウサギ。来いよ」

青年…三月ウサギは、白ウサギに手を差し出す。

「うん」

レイピアを収め、差し出された手を躊躇ためらいながらも、白ウサギは手を取った。

「アハハっ。おかえり、白ウサギ。あ、違ったね。俺が無理矢理」  
「チエシヤ猫」

三月ウサギは睨みながら、チエシヤ猫の言葉を切った。それ以上は言うなと目で言っているようだ。

だが、チエシヤ猫がそんな事を一々気にするなんて事は無く、へらへらと笑っている。

「はいはい、悪かったって。んじゃ、帽子屋、アリス」

一呼吸置き、チエシヤ猫は狂った笑みを浮かべながら言い放つ。

「ゲームをしようか」

## Tag く鬼ごっこく (前書き)

あらすじ

チエシヤ猫からの招待を受け、道案内をしてほしいならゲームをして勝ったら、という事に。勝ったら道案内と白ウサギの開放。負けたらアリスの首。勝つのは、どっち？

## Tag く鬼くつて

風が、通り過ぎた。

アリスの横を。

帽子屋の横を。

白ウサギの横を。

チエシヤ猫の横を。

三月ウサギの横を。

「ゲーム・・・？」

「そつ。ゲーム。とつても簡単なゲーム。アリスが勝つたら道案内してあげる。俺が勝つたらアリスの首ね」

「説明しろ。馬鹿猫」

不機嫌な帽子屋。ずっとチエシヤ猫を睨み付けている。まあ、普段から不機嫌なように見えるのだが・・・。

「鬼くつて」

・  
・  
・  
・  
・

バアンっ！バアンっ！バアンっ！

何度も何度も、静寂な森に響き渡った銃声。

だが、決して呻き声や叫び声は聞こえてこない。

「アハハハハハハハハっアハハハハハハっ。そんなんじゃ俺は捕まえられないよ、帽子屋」

「大人しく当たって死ね、馬鹿猫」

「えー？俺が死んだら道案内出来ないよ？」

馬鹿にするように笑いながら、チエシヤ猫は木から木へと移ってゆく。さすが猫。人とは思えない身のこなしで、帽子屋の銃弾から逃げている。

「ちょこまかと・・・！さっさと当たれ！」

怒りが頂点に達しているのだろう。いつも以上に不機嫌・・・な気がする。大声を上げる事事態が珍しい。

鬼ごっこ《ゲーム》が始まってから約5分。

チエシヤ猫に言われたルールの通り、鬼ごっこをしている。

「ルールは、アリスか帽子屋のどっちか1人がゲームに参加して、俺を捕まえればいい。どう？簡単でしょ。で、余った方は、高みの見物でもしててよ。制限時間は三月ウサギの持つてる砂時計の砂が全部落ちたら、ね」

チエシヤ猫は、武器なども使って良いという事で、帽子屋が参加する事になった。残されたアリスは、白ウサギ、三月ウサギと共に泉で見物。と、言ってもモニターなどの様子を見るための物がある訳では無いので、何がどうなっているのか判らない。

「なあ」

ずっと無言だったが、アリスが口を開いた。

三月ウサギは、砂時計から目線をずらし、アリスを見やる。白ウサギは、少し体を震わせ、顔を伏せてしまった。

「白ウサギ。なんで、チエシヤ猫アイツの見方なんだ？お前が付くような奴じゃないだろ？」

「それは・・・僕の弱みを握られたから、かな」  
「そうか」

遠くを見つめるかのように、アリスは夜空を見上げた。森の中にいるからか、星がよく見える。

すると、不思議と言わんばかりに白ウサギは首を傾げた。

「攻めないの？僕、アリスの仲間殺ほつしやみんそうとしたのに・・・」

「攻めてどうなる。大体、お前俺達に危害を加えたか？何もしてないだろ。そんなに気にする事じゃない」

軽く白ウサギの頭に手を置き、笑う。小さな子供をあやすように。顔を出る限り伏せていた白ウサギは顔を上げ、アリスを見やる。少しだけ、白いウサギ耳が揺れた。

どうして、アリスはこんなにも優しいのかな・・・？

アリスが、判んない・・・。

僕じぶんが判らない・・・。

僕は、どうしてチエシヤ猫の見方？

それは・・・

End time 〽終了の時間〽 (前書き)

こんにちは。

時間の都合上、前書きはこれからカットします。

と、言っても殆どの人が前書きなんて見ていないと思っで！はい！  
大丈夫だと思います・・・多分。

End time 〱終了の時間〱

鬼ごっこ。

こんな簡単な言葉では無い。

捕まえるために、殺す。捕まらないようにする為に、殺す。ただの殺し合いでしかない。鬼ごっこなんて言葉では、無い。

それが、この狂った世界のお遊びワンダーランドゲーム。

「ねえねえ！帽子屋。制限時間は後どれくらいだと思っ？」

身軽な体で銃弾たまを避けながらるチエシャ猫。それは、まるでお遊びのように。

「知るかつ。んなもん」

何を言われても動揺せず、拳銃の引き金を引き続ける帽子屋。正確に狙いを定めているものの、あと1歩でチエシャ猫に避けられる。そして、チエシャ猫のナイフが飛ぶ。

1丁じゃ無理か……。だったら……。！

ナイフを避け、帽子屋は手馴れた手付きでもう1丁拳銃を取り出した。器用に銃弾を込め、発砲する。

「2丁拳銃かつ。だったら、俺も普通にナイフぐらい使ってもいいよねっ！」

チエシヤ猫もナイフを取り出し、手と手の間にナイフを挟む。片手で計4本。両手で8本。それを、一気に飛ばす。勿論、狙いはきちんと定めて。

銃弾がチエシヤ猫の頬を掠め、ナイフが帽子屋の肩を掠める。そんな小さな傷は気にする事無く、2人は戦い続ける。それはそれは、楽しそうに……。

だが、チエシヤ猫が押され始めた。

ナイフの命中率も下がり、銃弾の掠り傷が増えていく。

やっぱり、ナイフじゃ駄目か……。仕方ないな。死ぬよりはマシか。

「ストップ!!!」

突然、チエシヤ猫が大声で鬼ごっこを止めた。

銃声も、風を切るナイフの音も消え去った。

残るのは、静寂の森。

「多分、これ以上殺り続けても、怪我するだけじゃん？だから、俺の負けって事で」

負けたと示すようにチエシヤ猫は両手を上げてみせる。

納得しないと言いたそうではあったが、帽子屋は拳銃を降ろした。

「楽しかったよ、帽子屋」

どうせ負けるつもりだったし。まあ、いいか。本当はもっと長く遊んでたかったけど……。ま、いつか。

鬼ごっこ勝者、帽子屋。

・  
・  
・  
・  
・  
・

泉で勝負がつくのを待つアリス、白ウサギ、三月ウサギ。  
すると、何かに反応するかのようになり、ピクリと三月ウサギのウサギ耳が動いた。

「勝負が、ついたな」

「え!？」

「どっちが勝ったんだ!？」

まだ、砂時計の砂は残っている。だが、どちらかが死んでいては勝敗が変わってくる。

ごくりと、唾を飲み込む音がした。

「帽子屋だ」

三月ウサギの言葉に安堵するアリスと、慌てる白ウサギ。

「チエシヤ猫は!？チエシヤ猫は死んでないよね!？」

「大丈夫だ。アイツが降参しただけだからな」

生きていると言う言葉に白ウサギは安堵を示す。

どうして、こんなにも心配しているんだ？

アリスには疑問が出てくるばかり。白ウサギはどうしてチエシヤ猫の心配をする？従わなければいけないほどの弱みを握られたのなら、相手の心配はしないだろう。逆に思っても普通だ。

なのに、どうして？

「こっちに向かってる。すぐに追いつくだろう」

「そうか……。よく考えたら、お前。なんでチエシヤ猫と帽子屋の勝敗が判る？2人がこっちに向かっている事が判る？」

「スキルだ。三月ウサギのスキル。能力と言った方が早いかな。説明は帽子屋に頼め。アイツも、スキルも持っているはずだ」

スキル、ねえ……。

特に興味を示しはせず、アリスは空を見上げた。

もう、太陽が昇り始めている。

鬼<sup>ゲーム</sup>ごっこ終了の合図のように……。

Only proceed 進むだけ

「白ウサギっ」

どこからか、僕の名前を呼ぶ声がした。僕の、友達の声……。

「チエシヤ猫。どうしたの？こんなに朝早く」

「三月ウサギの本を数枚破ったから逃亡中。捕まったらお説教だし」

へらへらと笑う友達に、僕は思わず笑みが零れる。

いつもの空。

いつもの太陽。

いつもの景色。

いつもの友達。

これが続くと思っていた。だって、僕等友達だもん。

勝手に自分で思ってた。

友達の異変にも気付けずに……。

だから、壊れたんだ。

僕等の絆が。

僕の、世界が……。

・  
・  
・  
・  
・  
・

太陽が昇りきって、夜明けが終わった。

その時には、帽子屋とチェシヤ猫と合流する事が出来た。・・・三月ウサギの能力で。

帽子屋とチェシヤ猫にはいたるところに切り傷がある。戦った後だ、普通の事だろう。

「んじゃ、俺が負けたから約束通り白ウサギの開放と道案内ね」

腕を伸ばしながら、チェシヤ猫は白ウサギを見やる。

白ウサギはとっさに視線を逸らし、俯いた。何か、言いたそうだ。

「・・・白ウサギの開放は、お前に従わなくていいって話だよな？」

よけいな、お節介かもな・・・。

少し躊躇ためらいながらも、アリスはチェシヤ猫に向かって口を開いた。

どうしても、自分が今言わないと後悔をしまいそうで・・・。

チェシヤ猫は口をへの字に曲げ、「どういうこと」と聞いてきた。普通の返答だろう。

「そのまんまの意味だ。つまり、白ウサギは自由って事だろ？」

「まあ、そうだね」

なぜそんな事を聞くのか疑問に思ったようで、チェシヤ猫は首を傾げた。

聞いていた白ウサギは顔を上げ、アリスを見つめる。言いたくても、言葉が出て来ないようだ。

「じゃあ、白ウサギはチェシヤ猫の隣にいていいって事だ。友とし

て、な」

「なっ!?!」

予想外の反応をしたチエシヤ猫。強くアリスを睨み付け、今にも襲ってきそうな獣だ。・・・視線が、痛い。

「友・・・?」

「ふざけんなっ!何があつたか知らない奴が口出しすんなっ!」

感情に任せ、言葉を吐く。チエシヤ猫らしく、無い。嫌、これが本当のチエシヤ猫の感情なのかもしれない。普段は嘘の仮面を被っているだけで・・・。

「じゃあ、言ってみるよ」

「はあ!?!」

「俺は何も知らない。だから、言ってみるよ。そうすれば何も言わない」

「っ・・・」

言い返せない。

言葉に詰まり、チエシヤ猫は黙り込んでしまった。

どうして?

なんで?

コイツには関係無い。

なぜ、知りたがる。

アリスこいつが判らない。

色々な言葉の疑問がチエシヤ猫の頭に渦巻く。

「・・・アリス。今は、聞かないで」

そんなチエシヤ猫を悟ったあのように、白ウサギが口を開いた。

「白ウサギ……」

「今は、聞かないでほしいんだ。チエシヤ猫も、僕も……そう思ってる」

辛い表情で、悲しい表情で白ウサギは言った。

さすがにアリスも聞ける訳無く、黙り込んだ。聞きたくても、聞いてはいけない。

白ウサギとチエシヤ猫の間に何が……あつたんだ……？

「アリス、馬鹿猫。話は終わったか？」

「帽子屋……。ああ、話は終わった。チエシヤ猫、さつさと道案内しろ」

「判った」

疑問を抱えたまま、アリスは進む。

芋虫に会う為に。

黒ウサギを殺す為に。

自分の居場所の為に。

進むだけ。

「どう？アリス達の様子は？」

太陽が上りきって、朝の涼しい風が吹くバルコニー。  
少女の黒髪が靡く。

『アリスは順調に進んでいますよ。まあ、芋虫のところまでどうなるかは判りませんが』

どこからともなく聞こえてくる感情の無い声。

少女はその声に耳を傾け、目を閉じる。何かを、感じるかのよう  
に。

「チエシャ猫は、どうしてる？」

『珍しく、アリスに負けたので、しばらくは不機嫌でしょう。今は  
道案内をしているところだと思います』

「へえ」

興味を持ったようで、少女は楽しそうに口を歪ませた。  
微笑んだ

『それと』

「!!! そう・・・なの。・・・これからも、監視をよろしく。三  
月ウサギ」

『はい、イニスハートの女王マイ・ロード』

声は消え、風の音だけが残った。

女王はゆっくりと目を開け、小さく笑った。狂った笑みで。

アリス……。

貴方は、真実を知る事が出来る……？

真実を知った時、貴方は……。

「期待しているわ……。アリス」

静かなる朝。

女王は笑う。

『それと、黒ウサギも動き出しました』

・  
・  
・  
・  
・

サク、サク、サク、……

一定のリズムで芝生を踏む音がする。

芋虫の下へ向かう、アリス、帽子屋、白ウサギ、チエシャ猫。途中まで三月ウサギはいたはずなのだが、いつの間にかどこかへ行ってしまった。

初めのうちはアリスは気にしていたものの、チエシャ猫に「いつもの事」と言われ、深く考えないようにした。

いつも、知らぬ内にどこかへ行っているのだろうか？

それを、不審には思わないのだろうか？

「……着いた」

ぼつりとチエシャ猫が呟き、足を止めた。

アリス、帽子屋、白ウサギも足を止め、目の前にあるソレ？を見る。

人がぎりぎり入って出られなくなるような隙間しか無い岩の前。周りにはあるのはあるのは木か草か……。家らしきものは無い。

「……ふざけてんのか？」

「ふざけてなんかないさ。ここが、芋虫の家……と言うか隠れ家のが合ってるかも。とにかく、この岩の隙間を通ればいいんだよ」「はあ？通れる訳が」「じゃあ、俺は道案内だけだから。後は自分で考えてよ」

一度ため息を付き、チエシヤ猫は引き止める間も無く跳躍をしてどこかへ行ってしまった。

「チエシヤ猫……」

チエシヤ猫が去った方向を見つめ続ける白ウサギ。

「……白ウサギ。行きたいなら行ってもいいんだぞ」

「……うん。でも、今は一緒にいない方がいいんだ。アリスと一緒にいるよ」

いつもの調子に戻ったようだ。作り笑いではあるが、ある程度は戻っている。

安堵し、アリスはつられて小さく微笑む。……今は、心配しなくても大丈夫なようだ。

「……で。芋虫のところへ行くのにはどうすればいいんだ？」

「簡単だよ。呪文を唱えるだけ。開け、ゴマっ！みたいな」

「で、その呪文って？」

少し、嫌な予感がした。

「嫌いな人の事を大好きって言えばいいんだよ。名前付きでね。簡単でしょ？」

白ウサギの言葉に、アリスは自分の予感があたっていたと思う。

ああ、これは難題だな・・・帽子屋にとって。

子供っぽい簡単な呪文・・・普通の人は。だが、プライドの高すぎる帽子屋が白ウサギやチェシヤ猫やヤマネの事を大好きなんて言える訳が無い。と言うか言ったら言ったで・・・アレだな。うん。

その事を判っている上で、白ウサギはニコニコと笑顔で「入る人全員ね」と付け足してきた。・・・余計な付け足しだ。

「あ、でも。アリスはやらなくていいんだよ。帽子屋さんと、僕だけね」

「帽子屋。お前」

バァンっ！

アリスの言葉を遮るように、銃声が響いた。帽子屋が撃つたのだ。銃弾はアリスの横を通り、背後の木へと当たった。ちゃんと銃弾が埋め込まれている。数センチずれば、アリスは死んでいた事だろう。

「帽子屋っ！当たったらどうするんだよ!？」

「クソウサギと二人で行け。俺は絶対に行かない」

行かないじゃ無くて行けないだろうがあああ！！！！！！！

言いたい言葉をぐっと堪え、アリスは不機嫌な帽子屋見る。絶対にこの場から動かないと行った様子だ。

これは、やっぱり最悪の難題だな・・・帽子屋にとって。

H a t t e r   a s s h o l e   〱 帽子屋の嫌いな人 〱

真つ暗な部屋。くろかん

部屋の中心には椅子があり、その椅子に少女が座っている。座っている少女は微動だにしない。

ただ、動かぬ人形のように座っている。そんな少女の頬に伸びた、手。

「おはよう……」

動かぬ少女にょんぬに手を伸ばした少女の、声。

「今日は、空が綺麗だよ。いつもより青いんだ」

たとえ返答がなくなるとも、少女は続ける。

「それと、花が綺麗に咲いてるよ。今度は花を摘んでくるね。沢山、沢山持つてくるから」

少女の声は、震えていた。

少女の手は、震えていた。

ぼつりと、少女にょんぬの膝に落ちた、水。

「だから、早く目を覚まして……」



青い青い空。

しばらくボーっと空を眺めている、と

「ど、い、て、く、だ、さ、いいいいいいいいいい！！！！！！」

叫びながら、人が落ちてきた。

勿論、避けられる訳無く、そのままアリスの体に直撃。ゲームで言うと、一撃必殺のようだ。

「うおおおお！！！！??？」

一瞬意識が飛んだかもしれない。

なんとか意識を保ち、アリスは自分の上に落ちてきた人も睨み付ける。

文句の一つでも言ってやろうと、した……が。言葉を失った。落ちてきた人の姿を見て。

「す、すみませんっ。本当にすみませんっ」

いそいそとアリスの上から降りながら、落ちてきた人は何度も謝罪する。

白ウサギも落ちてきた人に目を奪われていたようで、やっと我に返った。

「ア、アリス、大丈夫っ!？」

「あ、ああ……。大丈夫だ」

落ちてきた人を見ると、また目を奪われる。

銀色の美しい長髪に深い海色の目。整った顔立ち。細身の体格。

それに合うように、格好は提灯袖の白いシンプルなワンピース。靴は白いパンプス。全体的に白い女性。だが、その白さがとても美しく、人では無いかの・・・嫌、人では無いだろう。お決まりの獣耳と尾。では無く、角と尾。鬼のような角では無く、一角獣の角。尾は、馬だ。

「あの、大丈夫ですか・・・？も、もしかして、どこか痛いところがありますか!？」

「えと、大丈夫・・・です」

「良かったー」

微笑む表情がまた、なんとも美しく可愛らしい。全ての異性を虜にしてもおかしくはなさそうだ。

だが、この場で違うのが1人。

「おい、一角獣<sup>ユニコーン</sup>。なんでお前が空から降ってくる」

「帽子屋様!?!なんでここに・・・」

帽子屋・・・様？

帽子屋に様を付ける事を不思議に思いながら、アリス取り合えず口出しをする事をやめておいた。

「俺が質問をしている。それと、俺がここにいる事にお前は関係無い」

「えと・・・女王様に、処理してこいと言われて・・・」

「処理？」

「アリスは知らなくていい」

あっさりと帽子屋ははぐらかした。知らなくていいと言われると

余計に知りたくなる。

「……帽子屋様」

ぼつりと帽子屋の名を呟いたかと思うと、ユニコーンは帽子屋に微笑みながら手紙を差し出した。

帽子屋は無言で受け取り、白ウサギアリスに見えぬよう、中身を確認していく。

一瞬目を見開いたかと思うと、すぐに手紙をしまい、ユニコーンを睨み付ける。それに対して、ユニコーンは……笑顔。

「では、私はそろそろ失礼します。本当に、すみません」

一礼し、足を進めようとした。が、

「待て。お前は、手紙これを届けるためにここに来たのか？」

帽子屋の言葉で足を止めた。振り返らず、背を向けたまま、微笑むユニコーン。

「私は、偶然ですよ。この手紙も女王様に、もしも帽子屋様に会ったら渡してほしいと頼まれただけです。では、失礼します」

風のごとく、ユニコーンはすぐに消えてしまった。

消える前にいた場所を、帽子屋はじっと見つめている。

「帽子屋。さっきのユニコーンって、何だ？」

「……お前には、関係無い」

「え〜！教えてよ、帽子屋さん」

「チツ。……Io, la regina e unicorn



Welcome to the Dream 夢の世界へようこそ

「ここは・・・」

「よく来たのう。アリス」

本と紙束が散乱した部屋。その中心には女性が本を読みながら座っている。

薄緑色の髪に銀色の目。細身の印象なのだが、こいつと戦ったら負けそうと思わせる何かがあった。格好は、レースがあしらわれたマキシ丈ワンピース。頭には薄い黄緑色の腰まで長さのあるベール。靴は緑色のパンプス。全体的に緑。葉緑体かと思うほどに。だが、それはそれで別として、女性には普通と比べて綺麗だ。ユニコーンとまではいかないが、やはりそれなりに綺麗だ。

アリス、白ウサギ、帽子屋は芋虫の家の中へと入り、今となっている。

「お前が、芋虫か？」

「そうだ。今回のアリスは前のアリスよりかは、可愛げがありそうなお」

くすくすと小さく笑いながら、女性：芋虫はすぐ横にあった水タバコを吸い始めた。甘ったるい香りの煙が、部屋に充満する。

帽子屋以外は表情を歪め、鼻と口を手で塞いだ。

「くくくくつ……。やはりこの香りは堪えるか？」

「つ・・・」

「汝等の知りたい情報は、黒ウサギの居場所だろうか？」

不気味な笑みを浮かべながら、芋虫は煙を吐く。さらに、部屋が甘ったるくなる。

「早く教えろ」

「待て、そう焦るでない。少し疲れたらろう、良き夢を見るが良い。我からの、プレゼントだ」

もう一度芋虫が煙を吐き出した。

すると、目の前の景色が揺らぎ、意識が遠のいていく……。

アリス、白ウサギ、帽子屋……全員その場で倒れてしまった。

それからは、もう何も感じない。

・  
・  
・  
・  
・  
・

『帽子屋さん。貴方はとっても優しいのね……』

声が、アイツの声が響く。

止める。俺、は、思い出したく、ない……。

アイツの事は、思い出したくない……。

『また、ここに来てくれる……？私、帽子屋さんと一緒にいる時間が、楽しいの』

止める。

どうして、アイツはいつも俺を苦しめる。

アイツの声が

アイツの目が

アイツの口が

アイツの手が

アイツの全てが・・・

變おしい。

・  
・  
・  
・  
・  
・

『白ウサギっ』

ああ、彼が僕を呼んでる。  
待って。待って。

そんなに早く走らないで。

『ほら、置いてくよ』

お願い、待って。

足が上手く動かないんだ。

君の下へ行きたいんだ。

君の下へ歩きたいんだ。

君の下へ走りたいんだ。

『ほら……早く』

行かないで。行かないで。

置いて行かないで。

・  
・  
・  
・  
・  
・

『アリス』

誰、だ？

『私のところへ来て』

・  
・  
・  
?

どうして？

『貴方は黒ウサギと私を殺すの』

殺す……？

どうして？

なんで？

判らない。

わからない。

ワカラナイ。

『居場所・・・ほしいんでしょ?』

居場所・・・。

『私を殺して・・・居場所を手に入れて。それが、貴方の幸せ・・・』

』

誰だ?

どうして赤の他人がそんな事を言う?

お前は、誰だ?

The Mad Hatter Dreams 〈帽子屋の夢〉

「帽子屋様。おはようございます」

俺に話しかけてくる召使達。はっきり言うと、ウザイ。

「ああ・・・」

俺は、女王のお墨付き、と召使達に思われている。実際、それは間違っている。

女王にとって、俺はただの操り人形<sup>マリオネット</sup>。糸を引きちぎられるような事があれば、女王は躊躇<sup>ちゆうちゆう</sup>無く、俺を殺すだろう。女王のお墨付きなんて者がこの世に存在しているのは笑える話だ。

そして、今日。俺は女王に呼ばれた。どうせ、くだらない話だろう。

「帽子屋。公爵夫人に、薔薇の花を届けてほしいの」

「薔薇？なぜですか？」

そもそも、なぜ俺が届け物などしなくてはいけないんだ・・・。

「公爵夫人には、お世話になったの。だから、貴方が薔薇を届けてほしいの」

「・・・承知しました」

豪邸。

公爵夫人は、裕福な家庭と言うルールがある。そのルールに従って、公爵夫人の家は豪邸と決まっている。

「こんにちは、帽子屋さん」

「お初目にかかります、公爵夫人」

コイツが、公爵夫人か……。

外見は上の中。特に興味は無いが。

今はベットで上半身を起こしている。病気が何かだろうか？

「いいのよ。そんなに堅苦しくしなくって」

「じゃあ、言葉に甘えさせてもらおうとする」

「ふふっ」

微笑む公爵夫人の姿は、どこか儂い。……嫌、公爵夫人自体が壊れ物のガラスのようだった。触れたら全てが壊れてしまうかと思うほどに……。

「アンタは、どこか悪いのか？」

「まあ、足がちよつとだけ」

「そうか」

どうでもよかった。

普段の俺ならそう思っていたことだろう。だが、今は違った。

『公爵夫人を守りたい』

なぜか、そう思った。今思えば、笑える話だ。

公爵夫人と出会って月日が経った。

俺は、よく公爵夫人の家へいくようになっていた。女王の命令が無くても、自分から会いに行く事が多い。

ただ、公爵夫人かのしよの傍よにいる事が、とても・・・

嬉しかった。

「帽子屋さん。貴方はこの国をどう思いますか？」

「・・・そういうお前はどっ思ってるんだ」

「私は、狂った場所だと思ってます」

それは、合っている。

不思議の国ワンダーランドにいる人間自体が狂っている為に、気付かない者もいるが、確かに狂っている場所だ。

「でも、ここは私の居場所です。それに、貴方にも会えますから。

私は不思議の国ワンダーランドが、嫌いではありません」

「・・・そうか」

嬉しかった。

どうしてこう思うのか判らずに。俺は、ただ思い続ける。

そして、事件が起こった。

いつものように、公爵夫人の家へと向かった。

だが、公爵夫人は・・・

「すみません。公爵夫人は………お亡くなりになりました」

時が、止まった。

どうして？

なぜ？

公爵夫人かのじよは死んだ？

ああ、嫌だ。

どうしてこんなにも嫌になる？

判らない。

憎い。

憎い。

憎い。

誰が？

誰が？

誰が？

苦しい。

どうしてアイツは俺を苦しめる？

憎む相手が判らない。

ああ・・・

？

俺は誰が憎いんだ

Dream of White Rabbit ～白ウサギの夢～

「始めまして、君。名前は？」

僕に話しかけてきた、笑顔の人。

「僕、は・・・白ウサギ」

「白ウサギ、ね。俺はチエシヤ猫。よろしく、白ウサギ」

チエシヤ猫の差し出す手が、温かった。

一緒にいたい。

そう思って、僕はチエシヤ猫かれの手を取った。

「白ウサギっ！」

「どうしたの？もしかして、また帽子屋さん怒らせちゃった？」

「あっちが勝手に怒ってるんだよ」

バアン！バアン！バアン！

銃弾が、僕の横を通り抜けた。

当たっても死なないと判っていても、やっぱり痛いのはいやだなあ。

「よしっ！三月ウサギのところに逃げるぞっ！」

「おー！」

銃弾を避けながら、迷いの森へと走っていく。

「邪魔しに来たよ、三月ウサギ」

「おじゃまします」

三月ウサギは、本を読んでいた。

いつも本を持っていて、暇になると読んでる。ホント、本好きだあ……。

「また、帽子屋を怒らせたのか？」

本に視線を落としたまま、三月ウサギは話す。僕だったら本に集中して絶対に出来ない。

「白ウサギが」

「僕じゃないっしー！」

「え。だってさあ、帽子屋の拳銃に少し悪戯いたずらしたただだよ」

チエシヤ猫はよく、色々な人に悪戯をする。

その悪戯によって、死んだ人もいた。それでも、チエシヤ猫は悪戯を止めない。寧ろ、人が死んだ事を喜んでる。そう、チエシヤ猫は狂っている。不思議の国の住人はだいたいそうだと言うが、チエシヤ猫はそれ以上に狂っているのかもしれない。

人が死ぬ事を喜び、簡単に人の運命を捻じ曲げる。

自分の何かを埋めるように。

僕の事も、いつかは悪戯で殺すのだろうか？

「白ウサギ？どうしたの？」

「なんでもないよ。で、どんな悪戯をしたの？」

「アハハハつ。それは、秘密」  
「え〜」

笑いながら、僕の質問をあつさりとはぐらかす。

チエシヤ猫にとって僕は何？

チエシヤ猫にとって僕は誰？

チエシヤ猫にとって僕は友？

ある日。

僕は、森の中である人に出会った。

「・・・？ 誰？」

「白いウサギ耳・・・。白ウサギ、ですか？」

「え？なんで僕の名前・・・」

目の前にいる人は誰？

どうして僕を知っているの？

「私、公爵夫人と申します。良ければ、一緒にお茶でもしませんか？」

「別に、いいけど」

「では、行きましょう」

公爵夫人と会って、僕はチエシヤ猫のように温かい人だと思った。僕にとって、チエシヤ猫とは違う。お母さんのような温かさを感じ

たんだ……。

チエシヤ猫達にも公爵夫人の事を紹介して、4人でいる事が楽しかった。

そう、楽しかった……。

いつもの朝が訪れた。

晴天の朝は、とても気分がいい。

でも、この日が僕にとって最悪の日になるのは、数時間後……。

「チエシヤ猫……？」

「ん？どうしたの？白ウサギ」

いつもと変わらぬ、笑み。

いつもと変わらぬ、チエシヤ猫<sup>かれ</sup>。

いつもと変わらぬ、悪戯。

「どうして……？」

「え？だって、この人嫌いだから。白ウサギにひつついて……」

チエシヤ猫は、本当はいつもの笑みとは違っていた。でも、僕にはその違いが判らない。

目の前で倒れている公爵夫人に気を取られて……。

「どうして、倒れてるの？」

「俺が、足を傷つけたから。白ウサギに近付く足を、傷つけたから。白ウサギが、悪いんだよ？コイツに構ってばかりで、俺には全然……」

「僕の所為なら僕を殺せばいいじゃないか！」

判らない。

わからない。

ワカラナイ。

どうしてチエシヤ猫かれは公爵夫人あのみとを傷つけたの？

止めて。

やめて

ヤメテ。

僕は、気付けなかった。

チエシヤ猫かれが悲しんでいる事を。

自分の事で、いっぱいいっぱい・・・

スベテガワカラナイ。

## Alice's Dream (アリスの夢)

- アリス

それが、俺の名前。

けど・・・俺はアリスだ。と自分で名乗っていいのかが判らない。  
俺は、アリスの名前しか知らなかったから。だから、アリス。  
他人に言われたからとかは関係ない。知らなかったから・・・。

アリスは誰の名前？

アリスは誰の居場所？

アリスは誰のもの？

俺はアリス？

判らない。

「ねえねえ、お母さん。いつものお話して」  
「いいわよ。でも、これを聞いたらちゃんと寝るのよ？」  
「はい」

これはいつかのお話。

病弱な少女が、死ぬ前にあるお願いをしました。

「どうか、友達をください・・・」

それを見ていた神様は、少女に黒いウサギのお人形を差し上げました。

「これは、君の願い事を叶えるものだよ」

少女は、黒いウサギの人形に、お願いをしました。

「お友達になってください」

すると、人形は形を変化させ、黒いウサギの耳と尾をつけた少女へと変わりました。

「僕は黒ウサギ。君のお友達」

黒ウサギと少女はすぐに仲良くなりました。

でも、少女は人なのです。

命は永遠ではありません。

ある日、少女は深い眠りにつきました。

黒ウサギは、死と言うものが判りません。

昨日まで、一緒に笑っていた少女が死んだのです。

「僕は起きているのに、どうして君は眠っているの？」

黒ウサギには、ぽっかりと心に穴が空いた気持ちでした。

それから多くの時が過ぎました。

少女は変わらぬ目覚めません。

「僕は、君の為に何が出来る？」

何をしたらいいのか判りません。  
だから、黒ウサギは考えました。

君が目覚めるように、世界を作ろう。君の為の、世界。

それからまた多くの時が過ぎました。

黒ウサギは少女を連れて、少女だけの世界へと向かいました。  
不思議の国へ。

最初は2人だけの世界だった不思議の国に、人がやってきました。  
人は、傷を持っていました。

黒ウサギのように、心の傷を。

黒ウサギは何か出来ないかと、人に居場所をあげました。不思議の国と言う居場所です。

時が経つにつれ、人はどんどん増えました。

そして、やって来た人達は不思議の国に最初からいた黒ウサギの存在を、忘れていったのです。

その所為で、不思議の国の世界は、歪み？始めました。物語が進まないのです。

不思議の国の住人達は、黒ウサギがいるから歪んだと決め付け、黒ウサギを排除する事にしました。けれど、自分の手を汚す事を住人は拒みます。

だから、次。この国にやって来た人を、アリスと名づけ、アリスに黒ウサギを殺させようと考えました。

そして、アリスは物語を進める人形として、<sup>ドール</sup>歓迎されるのです。。。

『アリス』

誰かが、アリスを呼んでいる……。  
ああ、今は俺がアリスだったな。

『声に、惑わされないで』

声……？

『私は……ここよ』

どこだ？

お前はどこにいる？

『お願い……。私を見つけて』

お前は、誰だ？

お前は、どこだ？

お前は、何だ？

『私、は……。』

ああ、聞こえない。

お前の声が聞こえない。

「そろそろ、か」

水タバコを吸いながら、芋虫は呟いた。

部屋は、甘ったるい香りで埋め尽くされており、感覚を狂わしているようだった。実際、芋虫の吸っている水タバコの煙の香りに耐えられない者は、失神してもおかしくは無い。

そして、その香りに耐え切れず、倒れた者が3人。

アリス。帽子屋。白ウサギ。

彼等はどんな夢を見ているのでしょうか？

「眠りネズミ」  
ヤマネ

「はい」

どこからともなく、少女が現れた。

少し内側にはねた栗色の髪に鮮やかなオレンジ色の瞳。まだ、幼いようで、白ウサギよりも童顔。格好は、胸にリボンが付いたTシャツに、舌はベージュのハーフパンツ。Tシャツの上には、薄茶色のケープ。靴は、ブーツを履いている。まさに、可愛い少女。だが、お決まりの・・・獣耳と尾。丸い耳と、細長い尾。どうやら、ネズミのようだ。

「ヤマネ。汝は、アリスを連れて黒ウサギの場所へと案内しなさい。後の始末は女王に頼んでおいた」

「承知しました」

少女は、アリスを軽々と持ち上げると、一瞬の内にどこかへ去って行ってしまった。

残されたのは、芋虫と帽子屋と白ウサギ。

「くくくっ……。これからどうなるか、楽しみだのう。アリス」

・  
・  
・  
・  
・

「んあ……。？」

「起きましたか、アリス」

何か、頭に柔らかい感触が……。

目に映るもののピントが合わない。

誰かが、目の前にいるのが判っても、どんな人物かが判らない。

「……あ」

やっとピントが合ってきた。そして、気付いた。

目の前にいる少女が、自分に膝枕をしているという事に。

「うあああああああ！！??？」

なぜ？どうして？

急いで少女から離れ、アリスは状況を確認すべく、周りのものに目を移していく。

周りにあるのは木、木、木、木、木……それと、少女。

訳が判らず、混乱するアリスに、少女は黒い刃を突きつけた。

「静かにしてください」

「っ……」

冷たい汗が流れた。少女は、どこからともなく取り出した黒いナイフをアリスの首に突きつけている。この国の住人は皆武器を所持しているのだろうか。

「では、まず自己紹介します」

少女は、ナイフをケープの中にしまい、ペコリと一礼した。

「先程はすみません。小生は眠りネズミこと、ヤマネです。ちなみに、男です」

「・・・ハア！？男！？お前が！？」

「はい。この服は芋虫の趣味です」

服の問題じゃねええええ！！顔だ！顔！つか、芋虫の趣味かよ！

無表情とはいえ、どこからどう見ても少女だ。これが少年とは思にくい。嫌、思えないに近い。

「では、行きましょう。黒ウサギの下へ」

無理矢理手を引っ張られ、アリスは立ち上がった。

「ちよっ・・・」

止めようとするが、ヤマネは止まらない。アリスの手を引いたまま、足を進めていく。振り解こうとしても、力が強くて解けない。こんなに小さな少女・・・じゃなくて、少年のどこにこんな馬鹿力があるのだろうか。

逃げようとすれば、するほどにヤマネの力は強くなる。

「小生は案内を任せました。アリスを案内しなくてはいけません」

「離……」『いいのよ、これで』

「!?!」

突然、頭の中で、声があった。

自分では無い。誰かの、声。

『だって、貴方は私を殺すの。勿論、黒ウサギも』

なんだよ……。なんなんだよ!

お前は、誰だよ!

「くっ……。!」

その場で膝を付いた。

ヤマネもさすがに引きずる事は出来ず、足を止めた。

「アリス?」

だが、ヤマネの声は聞こえていないようで、アリスはもがくように倒れこんだ。

『ねえ……。居場所、ほしいんでしょ? 私もほしいの』

「居、場所……?」

『私を殺して。そうすれば、貴方も私も幸せになれるの……。』

五月蠅い、五月蠅い、五月蠅い!!!

俺は……!

ただ、居場所がほしくて……!

「誰も・・・殺したくない・・・」

目から冷たい水が零れ落ちた。止まらない、流れ続ける。

誰も殺したくは無い。

でも、それでしか俺は居場所を手に入れられないから・・・。  
だから・・・。

殺さなくてはいけない。

殺す

消す

壊す

あの時と、同じ・・・

俺が、殺す。

He was burdened with sin (彼は罪を背負う)

また、1人になった

アリスを芋虫の居場所へと案内してから一日。  
太陽が落ち始めている。

三月ウサギが戻ってくる様子は無い。1人だ。

「つまんない・・・」

この国で、チエシヤ猫は自由。

ルールに縛られる必要は無い。この国で唯一チエシヤ猫は何も縛られないと言う束縛を持った人物。チエシヤ猫は、1人。ルールに縛られた人物と違って、ルールに縛られないからこそ、1人。

「暇だな〜」

「こんにちは、猫さん」

突然現れた、角を生やした女性。全ての異性を虜にしてしまいうな美貌を持ち合わせている。

だが、チエシヤ猫にはそんな感情が無く、今、目の前にる女性が自分を楽しませてくれるかどうかで対応が変わる。だが、まずは笑顔。

「君誰？」

「<sup>ユニコーン</sup>一角獣と申します」

丁寧に挨拶をすると、ユニコーンは微笑みを浮かべる。

「一応、覚えとくよ。まあ、俺のところに来たって事は、俺の名前くらい判るよね？」

「ええ、勿論。チエシヤ猫さん」

「で、俺に何の用？」

「簡単な事です。深くは考えないで下さい」

ユニコーンはチエシヤ猫に手を伸ばし、微笑みを顔に貼り付けたまま、口を開く。

「私と手を組みませんか？」

一瞬、時が止まったように感じた。  
手を組む。

何の為？

「なんで、俺が君と手を組まなきゃなんないの？」

「私、帽子屋様が好きなんです」

「それに、俺と何の関係があるの？」

「協力してもらいたいです」

何、馬鹿な事言ってるんだ……。

笑顔は消さぬまま、チエシヤ猫は「へえ」と興味深げに言う。実際、あまり興味は無かったが、自分の所為で他の人に……特に、友達？に迷惑がかかるのが嫌だった。

「ふふつ。覚えてますか？1年前の事」

突然、話題が1年前の出来事になり、思い出してしまった。

「何か、関係があるの？手を組む事と」

表情が、少し引きつってしまった。もう、あの事を思い出してしまった時点でユニコーンこいつを殺しても良かったが、あえて止めておいた。話を聞いておいた方がいいと判断したのだ。

「覚えてますよね？公爵夫人の事」

「っ……。で、何？」

「私、これでも女王の召使なんです。私の情報網で、少し調べました。そうしたら、面白い事を見つけましてね……。チエシヤ猫さん。公爵夫人の足を傷つけたのは貴方でしょう？」

どこまで知ってるんだ、コイツ……。

さすがに笑顔が消え、チエシヤ猫は睨み付けながら腰にあるナイフの感触を確かめた。ヒンヤリとナイフは冷たい。その冷たさで冷静を取り戻し、チエシヤ猫は笑顔を顔に貼り付ける。

「そうだけど、何？」

「貴方はもう知っているでしょうけど、公爵夫人は何者かによって殺されました。その何者かって言うのが私なんですよ」

「!？」

「ふふっ。驚いてますね」

普通、不思議ワンダーランドの国では勝手に人は殺せない。女王の命令が無いから、たとえ、ナイフや拳銃で心臓を貫いても、死にはしない。ルールの一つだ。だが、それもチエシヤ猫には関係無い。チエシヤ猫につけられた傷は、癒えるのを待つしか無い。と言っても、治らない傷もある。

それなのに、公爵夫人はなぜ死んだのか。  
チエシヤ猫が殺した訳では無い公爵夫人はどうして死んだ？  
死んだと知らされた時は、チエシヤ猫は寿命だったんだと自分に  
言い聞かせた。それで、自分を納得させていた。

「どうして殺せたかは言えません。あ、ちなみに私の単独行動なの  
で、女王が命令した訳では無いんですよ？」

「そんな事どうでもいいからさ。早く、いいなよ。俺に何をしてくほ  
しいの？」

「貴方に　　を殺してほしいのです」

殺してほしい者の名前』

どうして　　を殺さなくてはいけないのか。

は・・・　　は・・・

「帽子屋様の気を一番引いているのは　　なの。だから、殺して

？」

「貴方も嫌いでしょう？白ウサギを奪っているのは今・・・

よっ」

甘い悪魔の言葉が囁かれる。

つ・・・。　　は、俺のなんだっけ・・・？

「ねえ、いい事だと思わない？」

「・・・俺は、そうは思えない」

ああ、　　が俺の何かなんてどうでもいいんだ。

俺は・・・

「? どうして?」

「俺は、もう白ウサギが傷つくのを見たくないんだ。きっと白ウサギは が死んだら悲しむから」

正直の、笑顔。

きっと、今の自分はこれを望んでいる。

例え、 が邪魔者でも、白ウサギが悲しまなければいい。

今はそう望んでる。これから先も・・・ずっと。

「そう・・・。本当は嫌だったのだけれど・・・。白ウサギは公爵夫人と仲が良かったようね。しかも、白ウサギは公爵夫人の死を知らないのでしょうか。まだ生きていると思っているようですね。笑える話です。でも・・・私が真実を伝えたら、どうでしょう?きっと、白ウサギは苦しむでしょうね。ずっとずっと・・・。ね?私と・・・手を組みましょうよ」

真実。

白ウサギは真実を知れば、どうなる?

苦しむ?悲しむ?涙を流す?

判らない。

でも・・・

知ってほしくは、無い。

だから・・・

だから・・・

「・・・判った」

一筋の涙を流し、チェシヤ猫はもう一度口を開く。

「・・・判つたよ」

ごめん。

俺の罪を許してくれとは言わないから・・・。

せめて、笑つて？

君の悲しみは憎しみに変えて、俺に頂戴。

全部、全部。

俺が背負うから。

## The Executioner 〈死刑執行人〉

優雅な一時。

少女達は、薔薇園お茶を楽しんでいた。

「それで、結局どうなったのかしら？ チェシャ猫は」  
「ニコニコ一角獣と手を組むようですよ」

紅茶を飲む少女と本を読みながらクッキーを食べる青年。青年の読む本にはクッキーの零れカスが全く落ちていない。

「そう……。それで、どう動くの？」

「……言わないといけません？」  
「勿論」

笑顔で言う、少女：ハートの女王に対し、青年：三月ウサギはため息をつく。本から視線はずらさずに。

「これ言って女王様に動かれると、俺が監視役だってバレそうなんですけど」

「その時は自分で対処しなさい」

「無責任ですね。俺は、死刑執行人と違って女王の操り人形マリオネットじゃ無いんですよ？」

「……そうね。まあ、手を組んだと言う事だけ判れば十分です。

早く監視に戻りなさい」  
「……はい。イエスハートの女王」

三月ウサギは強風と共に消え去った。

女王は何事も無かったかのように、紅茶をまた飲み始める。

ユニコーンとチェシャ猫はどう動くのかしらね……。

お茶を楽しみながら、女王は笑う。

・  
・  
・  
・  
・

重い目蓋まぶたを開き、ゆっくりと意識を取り戻していった。

完全に意識が戻った訳では無いが、ある程度の事が判るようになってきた。

「帽子屋……さん。起きてる……？」

「ああ……」

全身力が抜けていた所為で、上手く体が動かない。帽子屋と白ウサギ。

帽子屋は白ウサギより前に起きていたようで、無理をしながらも立っている。白ウサギの方はまだ起きたばかりで、上手く立てない産まれたての子羊のようだ。

「ははっ……。上手く動けないや……」

「そんな事よりも、芋虫はどこへ行った？」

眠る前にいた場所からは移動していない。だが、芋虫の姿が見当たらない。

まだ、部屋に香りは充満している。さっきまでこの部屋で水タバコを吸っていたのだろう。

「さあ？帽子屋さんのが先に起きてたんでしょ？」

よろよると立ち上がりながら、白ウサギは笑みを顔に貼り付ける。

「ああ。・・・ウサギ、お前レイピアはあるか？」

「うん、一応」

腰にあるレイピア。白ウサギ自身は人を殺す物では無く、ただその場<sup>しの</sup>凌ぎの物と思っている。誰も、殺したくは無い。例え甘い考えだとしても、自分が辛い思いをしても・・・。

「今から言う事を良く聞け。ここにアリスがいないって事は黒ウサギの場所に案内されていると考えた方がいい。アリスを殺す事は誰にも許されない。そこはいいが、俺達は恐らくここで始末される事になるだろう。女王の命令で動く、死刑執行人になつ！」

バン！

銃声が響いた。部屋の柱に銃弾が食い込んでいる。

そして、柱の後ろから少女が出てきた。

「・・・よく、判りましたね」

長い銀髪に淡い青い右目と淡い赤い左目のオッドアイ。きしゃで病弱にも見えかねない痩せた体。格好はフリルがふんだんあしらわれた黒いゴスロリ（ゴシッククロリータ）ワンピース。外見としては可愛らしいフランス人形。だが、片手には少女と同じぐらい・・・嫌、それ以上に大きい漆黒の大鎌を持っている。

「死刑執行人。女王の操<sup>マリオンネット</sup>り人形」

「ええ、私は人形です。今日は白ウサギを殺す為に来ました」

感情の見えない目と淡々とした口調。本当に心の無い人形のようにだ。

大鎌を振り上げ、地面を蹴り上げる。少女：死刑執行人は白ウサギに向かつて風のごとく刃を振り下ろす。白ウサギは早さに反応出  
来ず、当たると覚悟した……。が、

ギイイイイン!!!

刃と、黒い拳銃がぶつかる音がした。

「何を、するのですか。帽子屋様」

「帽子屋さん……？」

白ウサギは目を丸くし、啞然と帽子屋を見る。

「勘違い、するなよ。俺はアリスの為に動く。帽子屋はアリスが望むの事ならば、人を殺す事も許されるからな」

「……アリスは、今何を望んでいるのですか？」

即座に距離を取り、死刑執行人は目を細める。何かを確かめるかのように。

「今、アリスがここにいたら、クソウサギの死なんてものは望まないんだよ」

バアン！バアン！バアン！

銃弾に素早く反応し、避ける為に大鎌を使って跳ね返そうとした。だが、進路を少し変えるだけで、死刑執行人の頬を掠め、肩を掠め、膝を掠めた。

赤黒い血が流れるように出てきた。その血を手で確認する。

「死刑執行の妨害人と判断します。これより、死刑囚を白ウサギ。帽子屋とし」「待って」

「・・・？」

「今狙ってるのは僕でしょ？帽子屋さんは関係無いよ。だから、僕が君を殺すよ」

レイピアを抜き、構える。

何か言おうと帽子屋は口を開こうとしたが、口を閉じた。

白ウサギの姿を見て。

「白ウサギの資料は確認しています。ですが、これは予想外ですね」

「ちゃんと、楽しませてよお？」

狂ってる。

今、白ウサギ（かのじょ）は狂ってる。

ニヤリと不気味に、怪しく口が裂けて見える程に狂おしく笑う。

本当に、目の前にいるのは白ウサギ？

「予想外でも、殺す事に変わりはありません」

改めて大鎌を構え、死刑執行人は動き出す。

死刑囚の心臓を貫く為。

死刑囚の鼓動を消す為。

死刑囚の息を止める為。

死刑執行人は動く。  
かのじよ



き取ってさあ！最高じゃん！最高の芸術だよねえ！」

クルッテル。

今の白ウサギを見れば、普通は思ふ言葉だろう。普段が普通ならば、なお更。

人を殺す事を楽しみ、

死を最高の芸術だと言う。

壊れたゼンマイ仕掛けの玩具だ。

「本当、貴方は狂っています」

「そう。別にそんな事どうでもいいよ。それよりさあ、君が女王に従う理由わけ。僕知ってるんだよねえ」

「？ どういう意味ですか」

悪魔で淡々とした口調で、動揺する様子は見せない。

「そのまんまの意味だよ。君の過去を知ってるだけだけ。ね？」  
「・・・どう、して。知ってるんですか」

初めてと言ってもおかしくは無い。死刑執行人かのじよが、動揺した。大鎌を振り上げ、白ウサギぬ向かって走る。だが、それはあっさり避けられた。真っ直ぐな攻撃の為、避けられるのは普通だろう。

「アハッ。怒っちゃった？ごめんねえ？」

「五月蠅い、です」

記憶が蘇える。

封じていた記憶。

大切に、大事な・・・記憶。

ああ、でも・・・

思い出したくない。

・  
・  
・  
・  
・  
・

私は、10になる前に捨てられた。  
生きていくのがやっと。

深い深い森の中に捨てられた所為で、町に行く事は叶わなかった。  
1人で、生きていく。

森の生き物を殺して食べなければ、生きていけない。  
殺さなくては、食べられる。食べられる前に、殺す。生きていく  
為に。

そして、そんな私の前に・・・  
赤いドレスの女性が現れた。

『お主、強いおう。その強さ、ここで使うのは勿体無いのお』

血塗れの私に、恐れる事無く、女性は私に近付いてきた。

『・・・誰、ですか？』

『妾は、ハートの女王。国を治める者じゃ。お主の名は何と言つ？』  
『名前なんて・・・ありません』

女王は私に視線を合わせ、頬を撫でてくれた。なぜか、とても手が温かく感じた。

『それでは、不便じゃろう。どうじゃ、妾の下に来ぬか？』  
『・・・女王様の・・・？』

首を少し傾げ、疑問に思う。

『ああ、そうじゃ。お主は今日から死刑執行人。だが・・・その名前はお主に似合わぬ。だから、もう一つ名前を上げよう』

笑みを浮かべ、女王は言う。

『キティ。キティじゃ。だが、キティと言う名は妾とお主の2人の時だけにな』

無言で頷いた。

嬉しかった。

居場所をくれた。

必要としてくれた。

だから・・・

私は貴方に忠誠を誓う。

どれぐらい時間が経っただろうか。もしかしたら、あまり時間が経っていないのかもしれない。

白ウサギと死刑執行人の殺し合いは続いていた。

今は、珍しく死刑執行人が取り乱し、自分の感情を露あらわにしている。そして、白ウサギはそれを楽しむ。

「人形のくせに、なんで感情なんて出してるのさー。怒られちゃうよ?」

「っ……」

こんな奴の言葉に惑わされるな。目の前にいるのは、死刑囚。私が倒さなければいけない人物。

何とか落ち着きを取り戻し、大鎌を構えなおす。

「死刑囚、白ウサギ。処刑」

「アハハハつ。冷静になっちゃったんだ。つまんなー。もっと取り乱してよ、僕を楽しませてよ?」

レイピアを付き立て、白ウサギは走る。それに迎え撃つ死刑執行人は、柄の先を地面に付き立て、大きく跳躍した。そして、瞬時に大鎌を構え、上から白ウサギに迫る。白ウサギも反応し、レイピアの方向を上から迫る死刑執行人に向かって突き立てる。

キン……

風を切る、音がした。

白ウサギの首には大鎌の刃が。死刑執行人の首にはレイピアの刃が。

「・・・私は、今死んでも構いません。貴方を道連れに出来るなら「怖いねえ。僕はまだ死にたく無いかな？」

ドスッ！

「っ・・・!？」

突然、死刑執行人の首に衝撃が走り、立っていられなくなった。よろよろとその場に倒れる。麻痺しているのだ。

「あつりー？僕、何もしてないんだけど・・・帽子屋さん？」

目を細め、白ウサギはレイピアを降ろす。どうやら、自分が何もしていないのに相手が倒れた事に不満を持っているようだ。

「お前、本当にクソウサギか？」

「うっん。僕はクソウサギじゃ無くて、白ウサギ。白ウサギの役目をこなす為の、白ウサギ自身を守る為のもう一つの人格。白ウサギの弱い心が生み出した、白ウサギだよ。もう1人僕は優しすぎるから」

ドスッ！

「っ・・・。まだ、意識あつたんだ・・・」

白ウサギの腹から突き出る銀色の短剣。赤黒い血が出てきている。

「死刑・・・完、了・・・」

麻痺している体を無理矢理起こし、短剣を白ウサギに突き刺すと言う作業をした為、死刑執行人はすぐに倒れてしまった。さすがに意識は無い。

そして、刺された白ウサギも血を流しながら倒れた。

「ハハツ・・・。馬鹿、だね・・・。急所、外してる・・・。僕は・・・死刑囚・・・なのに、さ」

「喋ると傷が開くぞ」

「それは、嫌、かも・・・。まだ、白ウサギを・・・死なす、訳には・・・いかない」

死から逃れるかのように、立ち上がろうとする白ウサギ。

だが、それは叶わず腕に力が入らない。ただ、出血量が多くなるだけ。

歯と歯が擦れるギリギリという音がする。悔しいとでも言うつかのように。

「動くな。応急処置ぐらいはしてやる」

「? なんで・・・? 帽子屋、さん・・・」

「俺が、何をしようとか関係無いな」

貫通してるな・・・。抜いたら、大量出血で死ぬ。かと言って、今は治療の道具を持っている訳では無い・・・。

「チツ。これを使うか」

「?」

帽子屋は何か、どろりとした緑色の液体が入った小瓶を服の中か





Alice kill strategy ? (アリス殺し作戦?)

命って、何？

殺すって、何？

死ぬって、何？

判らない。

このまま、全て失ってしまいたい。

全て壊れてしまえばいい。

・・・？

全てって、何？

何を持っていた？

俺は、何を持っていた・・・？

・・・

「っ・・・」

「アリス。どこか痛いのですか？」

さっきまでの声も消え、元に戻った。どこも苦しく無い。涙も出ない。

だが、アリスは自分自身で思った言葉に疑問を覚えていた。

あの時と、同じ・・・？

あの時とは、いつの事が。自分自身で思った言葉にも関わらず、判らない。

自分の事を深く考えていた所為で、ヤマネの声が聞こえていない。全ての音が、アリスには聞こえていない。

なんだ？なんなんだ？

俺は、人殺しをした事がある・・・？

じゃあ、一体誰を？

誰を殺した？

疑問が疑問を生み出し、頭の中で言葉が重なっていく。

「俺は・・・いつ・・・」

「アリス、聞こえてますか？」

「誰を・・・」

「アリスっ！」

「うおっ!？」

ヤマネはアリスの首に、ナイフを突きつけた。そのお陰で、やっと我に帰ったアリス。オマケに冷や汗まで流れ出している。

目を細め、冷たい目でヤマネはアリスを睨み付けた。なぜ、睨まれるのだろうか・・・。

「困ります。小生は帽子屋やチェシヤ猫のように攻撃系タイプのスキルは持っていないので、夜になったらアリスの安全は保障できないんですから」

「・・・スキル・・・？」

そう言えば、前に三月ウサギもスキルとか言ってたな・・・。

三月ウサギの言葉を思い出し、そんなものがあつたんだと思う。

「・・・。スキルは」

スキルの事を考えているアリスを悟ったのか、ヤマネはスキルの説明をし始めた。

ワンダーランド不思議の国の住人は、全員スキルを所持している。殆どが、通信系か回復系のスキルだ。攻撃系のスキルを持っている者は少ない。

そして、スキルには3パターンある。

1つは、攻撃系スキル。

1つは、通信系スキル。

1つは、回復系スキル。

攻撃系スキルは、戦闘に活用できる能力の事。通信系スキルは、相手とテレパシーで連絡を取り合う能力の事。回復系スキルは、自分の、もしくは相手の傷を癒す能力の事。

普通は、1人1つなのだが、まれに2つ以上のスキルを持つ者もいる。

「これが、スキルと言うものです。判りましたか？」

「ああ、一応・・・」

興味が無かつた為、特に気にはしていなかったが、知つてみると不思議なものだ。まあ、自分には無いものだが・・・。

「それでは、行きましょう。さっき言った通り、小生は通信系スキ

ルと回復系スキルなので、チェシヤ猫に会つと最悪です。なので、今から急いで」「誰と会つと最悪だつて?」

木の上から、声がした。いつも、笑顔のあの声が……。そして、ヤマネが最悪だと言つた人物が。

「……最悪です」

「そんな事言わないでよ」

身軽な体で、つま先から地面に降り立つた。相変わらずの、笑顔を浮かべながら。

だが、今日は前回会つた時と違う。両手に、鉄の鉤爪の武器を装備している。どうやら、殺す気で現れたようだ。

「チェシヤ猫。お前、なんでここに……」

「いいじゃん。俺がどこにしようと思つたら」

不気味な笑みを浮かべているチェシヤ猫。いつもと変わらぬように見えるのに、アリスは違う感覚を感じた。

悲しい。

なぜか、アリスはチェシヤ猫の笑みが悲しげに見えた。

「……アリス。小生は今から帽子屋お連絡を取りながら、戦います。なので、不利になります。完全に守れると言う保障は無いので、どこかへ逃げてください。後で、探しますから」

「っ……判つた」

自分が戦えたのなら、無理にでも残つていただろう。

でも、自分は無力だ。何の役にも立たない。逆に、いれば足手纏いになる事だろう。せめて、それは避ける為、アリスは走り出した。

とにかく、チエシヤ猫から離れる為に。

「ふうん。アリス、1人で行かせてよかったの？」

逃げたアリスを追いかける事はせず、寧ろ計画通りとでも言いたそうな笑みを浮かべる。そこで、ヤマネは悟った。

「……どう言う、意味ですか」

頭では判つていても、つい聞いてしまう。判つていると思つてい  
る事が、嘘だと言つてほしいから。嘘であつてほしいから。

「あれ？忘れたのー？アリスは不思議の国の住人じゃ無い。だから、  
アリスは誰にでも殺せる。頭の良いヤマネなら、判るよね？」

「……誰かと手を組んだのですか……。最悪ですね。それに、  
小生はチエシヤ猫を殺せない。ああ、本当にアリスが来るとろくな  
事がありません」

ため息を漏らしながらも、ケープの中から柄が折りたたまれてい  
る戦斧せんぶを取り出した。すぐに柄を長くし、構える。別人のように、  
感じる殺気を出しながら、チエシヤ猫を睨み付けた。普通の人間な  
ら、恐怖で震え上がったもおかしく無いほどの、殺気。

「悪いが、ここでしばらく倒れる。チエシヤ猫」

「ヒュ」。怖いねえ。どうして、戦いになると君は言葉遣いが変わ  
るのかな？あ、それは白ウサギも似たようなものか」

「茶番は終わりで。さつさと、くたばれ！」

ヤマネは戦斧をチエシヤ猫に向かって、振り下ろした。

白ウサギへ

俺は許してあんで言わないから。

ずっと君に笑っていてほしい。

光の中で笑ってほしい。

君の憎しみは全部俺が貰うから。

だから・・・

アリスを殺す俺を憎んで？  
きみのともだち

Alice kill strategy ? (アリス殺し作戦?)

「ハア、ハア、ハア・・・」

走る。

「ハア、ハア、ハア・・・」

逃げる。

チエシヤ猫から。

逃げる先に何かがあるのかも知らずに。

・・・

「そんなに急いでどこへ行くの？アリス」

不意に、足を止められた。背後から異性を誘惑するような、美しい女性の声で。

振り返ると、そこにいたのは・・・

「これで、会うのは2度目ですね。私はユニコーンと申します」

「・・・何か、用か？」

相変わらずと言っていい程美人な女性。気を抜けば、取り込まれてしまいそうだ。

だが、今はそんな事よりも、チエシヤ猫から少しでも逃げなければいけない。目の前にいる奴に構っている余裕は無い。

「そう慌てないで下さい。チェシヤ猫さんなら追いかけて来ませんよ。安心して下さい。アリスを殺すのは私ですから」  
「俺を、殺す・・・!？」

1歩1歩と後ずさり、ユニコーンから離れようとする。  
だが、ユニコーンはそれを許さず1歩1歩と近付く。アリスは木に背を付き、追い詰められた。・・・お決まりだ。  
ナイフを突き付け、ユニコーンは笑う。

「チェシヤ猫さんには協力して頂きました。ちょっとばかり脅す形になってしまいましたが・・・。そんな事はどうでもいいです。ただ、帽子屋様に近付くゴミを処理するだけ。私が・・・私だけが、帽子屋様の物でいればいいのです」

狂った感情。

それは、愛と言う名の狂った感情。

自分を愛してほしいと思う感情が、きっとユニコーン(かのじよ)を歪めた。

ユニコーン(かのじよ)は歪んだ感情の塊かたまり。

「・・・それは、お前の居場所なんだな」

「? どういう事? 私の居場所・・・?」

「ただ、縊すがり付いて生きる。それが消えたら、アンタはただの屍しかばねだ」

自然と言葉が出てくる。

どうして、こんな事を言うのか判らない。

鼓動が、高まる。

変な、感じだ・・・。

1歩1歩とアリスが近付く。それに、逃げるかのように1歩1歩とユニコーンは後ずさる。立場が逆転した。

「っ……近付かないで」

「見てもらえなくなるのが、怖いんだろ？その恐怖から、俺を殺そうとしている……。違うのか？」

何もかも見通してしまうような、冷たい目。

「っ……そんな目で私を見るなああああ！！！！」

襟首を掴み、ナイフを振り上げてアリスの心臓に向かって振り下ろす。

とっさに目を閉じ、ヤバイと思った……。

「？」

痛みがやってこない。

恐る恐る目を開けると、目の前には……

「！？」

鞭で捕らえられたユニコーンの姿。強く握っていたナイフを地面に落とし、無理矢理地面に引っ張られた。背中を強く打ちつけ、ユニコーンは自分を捕らえた人物を睨み付ける。

「どうしてここにいるの！三月ウサギっ！」

「女王の命令、だな」

片手にユニコーンを捕らえる縄に繋がった鞭<sup>むち</sup>。そして、片手に本を読みながら、三月ウサギは冷静にユニコーンの問いに答える。

「手紙、帽子屋に渡しただろ。アレ、一時的にアリスを任せろって言う手紙だ。女王から聞いただろ？それで、お前は勘違いしたようだがな。帽子屋が城に帰って来るものだと思っただのか？」

悪魔で視線は本のまま、見下した笑みを浮かべる三月ウサギ。だが、それはとても不気味で・・・悪魔のようだった。

「五月蠅い五月蠅いつ！三月ウサギには関係無い！」  
「そうだな。俺には関係無い。だが、アリスを殺されると女王<sup>がき</sup>に叱られるからな」

本を閉じ、三月ウサギはユニコーンに近寄る。  
そして、笑みを浮かべてユニコーンの腹を踏み付けた。

「いつ!?!」

声を上げようとすると、三月ウサギは腹を踏み付ける。それを何度も何度も繰り返した。

苦しみに表情を歪めながらも必死に耐えるユニコーン。それを止めようとはせず、アリスは呆然とその場で立ちすくす。そう、動けない。

恐怖が纏わり付き、まるで縛りつけているかのように、動けない。

「俺は女王の命令で、アンタを殺す事は出来るんだよ。なあ、アンタの血はどんな赤色だろうな」



## Memory Unicorn ? ～一角獣の記憶～

私は、誰からも愛されなかった。

子供の頃は妹がいて、親は妹ばかり。ついには、私は捨てられてしまった。

迷いの森に捨てられて、外には出られなかった。

帽子屋様に拾われるまでは。

「どうしたんだ？」

森の中で、私より少し年上の青年に会った。この時私は、多分16歳。捨てられた所為で、はつきりした歳は自分で判らない。

「・・・誰、ですか？」

「俺は帽子屋。お前は？」

「・・・<sup>ユニコーン</sup>一角獣です」

ボロボロの服を着た私を見て、帽子屋様は手を差し伸べた。何も言わずに、無言で。

無言でも、私はこの人なら私を必要としてくれるんじゃないかと思っただから・・・

私は手を取った。

そして、私はハートの女王の召使になった。

帽子屋様は女王様のお気に入り。だから、帽子屋様と気軽に話す事は許されなかった。私はただの召使。帽子屋様のように気に入られている訳では無いから。

数年の間、私と帽子屋様が話す事は無かった。

でも、私は帽子屋様の事を思っていた。自然と目で追って、たま

たま目が会つと顔が熱くなる。

私は彼に恋をした。

「帽子屋様、おはようございます」

朝の挨拶。全員の召使と一緒にする為、帽子屋様は見向きはしない。それでも、私はやっぱり帽子屋様を目で追ってしまう。

見ているだけで、良かった。

見ているだけで、良かったはずだった……。

「お呼びでしょうか。女王陛下」

突然、女王様に呼び出された。

ただの召使の私に何の用だろうか。

「ええ。呼びましたよ、一角獣<sup>ユニコーン</sup>」

「何の、ご用でしょうか？」

「しばらく、帽子屋の死体処理を担当してほしいの」

女王様の言葉がとても嬉しかった。

たとえ、死体処理でも帽子屋様の傍にいられる。嬉しい以外の何でもない。

「はい、承知しました」

「始めまして、帽子屋様。ユニコーンと申します」

「・・・始めまして？それは、違う気がするが」  
「え？」

もしかして、覚えてるのですか・・・？  
期待にふくらむ。だが、

「いつも見てる。と言っか、お前に見られてる」  
「あ、そっちですか」

気付いてたんですか・・・。  
少し、顔が熱い。

「じゃあ、仕事に行くぞ」  
「は、はいっ！」

覚えて無くても、私はずっと覚えてます。  
貴方の事を・・・。

「これで、片付いたな」

帽子屋様は人殺しの仕事。普通は死刑執行人が動くものだが、帽子屋様は死刑囚を殺す訳では無いから、人殺しをしている。何でも、女王様に頼まれた依頼をこなしているとか・・・。

私はその死体処理。死体に慣れているから、見る事はもう普通。

「後は頼んだぞ」  
「はい、承知しました」

貴方が頼ってくれる。それだけが、私の生きがい……。

そして、しばらく経ったある日。

私は、聞いた。

「ねえ、帽子屋様って怖いわよね」

「そうそう、いつも不機嫌そうで……」

「たまに、殺されるんじゃないかって思うわよ」

噂話。

ただの、噂話で他人の考え。

でも、私は許せなかった。

許せない許せない許せない許せない許せない！！！！

あつひ帽子屋様の事を悪く言うのは許さない！！！！絶対に！

私は、帽子屋様の事を悪く言った人を殺す事にした。

でも、不思議の国にはルールがある。勝手に人は殺せない。

だから、どうやったら殺せるのか……私はずっと考えていた。

ワンダーランド不思議の国の住人は、女王の命令か寿命で死ぬ以外ありえない。

他に、何か方法が無いのか……。

「もしかしたら……」

前、城の本で不思議の国と現実の間にある道を聞いた事がある。

それは、世界と世界の狭間。そこならば、不思議の国のルールは

関係無いのでは無いだろうか。

そして、私は探し続けた。世界の狭間を。

しばらくして、私は世界の狭間を見つけた。そこにいると、気味悪くなる。それは、私が不思議の国の住人だからだと思う。でも、そこなら誰でも殺せる・・・はず。

試しに、1人を連れて心臓を刺してみた。血が流れ出て、そのまま起きる事は・・・無かった。ここでなら、殺せる。そう確信した瞬間だった。

だから、沢山沢山人を殺した。何人も何人も・・・。

「これじゃあ、駄目・・・」

血塗れの手を見て、思った。これじゃあ足りない。これをつけていても、帽子屋様は私を見てくれない。だから・・・

帽子屋様の周りにいる人を殺そうと思った。

## Memory Unicorn ? ～一角獣の記憶～

ある日。帽子屋様の死体処理を外された。

そのお陰で、少し帽子屋様の情報が入りやすくなった。帽子屋様にも特に怪しまれない。傍にいないから、出来る事。

情報を仕入れている内に、私はある情報を手に入れた。帽子屋様は公爵夫人に会いに行っている。

ああ、私が殺さなきゃいけないのはこの人だ。

聞いた時にそう思った。

だから、私は公爵夫人に会いに行った。

「始めまして、公爵夫人様」

「始めまして。帽子屋さんの知り合いなのでしょう？私の事は公爵夫人と呼んでください」

優しい人だった。最初のイメージはそんな感じ。でも、この優しさが帽子屋様を誘惑している。改めて、殺さなきゃいけないと思った。

「はい。私の事は一角獣ユニコーンと呼んで下さい。公爵夫人」

「ええ、判りました。ユニコーン。いつでも家に来てくださいね」

いつでも。その言葉を聞いて、私は毎日公爵夫人のところへ行くと決めた。

少しでも早く、公爵夫人に近付くために。

私と公爵夫人はすぐに仲良くなった。

そして、作戦を実行する時がきた……。

「公爵夫人。見てほしいものがあるのです」

「見てほしいもの……？」

「はい」

これで、最後。

仕上げにかからなければいけない。

「それは、どこにあるの？」

「少し遠いところにあるのです。だから、車椅子を使って一緒に行きませんか？勿論、行くまでは目隠しをして」

「いつ、ですか？」

「明日、でどうでしょう？」

「はい、いいですよ。楽しみにしていますね」

これで、全ての材料は揃った。

明日、公爵夫人を殺す……。

これで、いい。未練は……無い。そう、無い……。

だって、公爵夫人と私はただの……ただの……

一日が経った。天気は最高の晴天だ。

「行きましようか、公爵夫人」

「ええ、楽しみにしているわ」

目隠しをして、公爵夫人を連れて行った。車椅子を押ししながら、話しをしながら。

世界の狭間に着いた。

公爵夫人は苦しい顔はしなかった。世界の狭間にいると言つことは、体調不良になつてもおかしくは無かつたと言つのに……。

「着いた、よ」

「目隠しを取るわね」

悪魔で明るい調子で、公爵夫人は話す。……どうして、こんなにも明るいのか？

目の前に広がるのは……無。

何も無い、無の世界。上下左右全て無い。

「……凄いわね。とても、綺麗だわ」

「そうね。私はいつてもここで人殺しをしているの」

「……そう。さようなら、ですね。これで」

「ええ、そうよ。帽子屋様を私から奪つた貴方が悪いの……」

短剣を取り出して、公爵夫人に刃を向ける。少し、手が震えた。

いつもの事なのに……どうして？

もやもやとする判らない感情は無理矢理に消して、公爵夫人を睨み付ける。でも、公爵夫人は笑っていた。全ての事が判っていたかのように、笑った。

「ごめんなさい……。それと、ユニコーンは帽子屋さんと幸せになっ」「それ以上言わないで!」

「それ以上言おうと……」

「ごめんなさい。もう、言わないわ。ユニコーン、貴方と出会えて……良かったわ」  
「っ……っ」

グシャツ。

気持ち悪い。

音も、感触も、感覚も、気持ちも。

いつも以上に、気持ち悪い。心臓を1突きしただけ。それで、簡単に人は死ぬ。こんなにも簡単な事で……。

ああ、人はなんて弱いんだろう。

いつもの事をしたはずなのに……今日は違う。

心臓が痛い。

別に、怪我なんかしてない。でも、心臓が痛い……。

痛い……。

それでも、私は殺し続ける。

公爵夫人の罪を忘れないように。自分を責めるように……。

私は人殺しをする。

今思えば、本当は公爵夫人といるのが楽しかったのかもしれない。でも、嫉妬の方が大きくて……私は殺した。殺してしまった。

あははっ……。

今になって気付くなんて、遅いかもしれない。もしかしたら、私は帽子屋様の傍にいる事が出来て、公爵夫人と帽子屋様が結ばれて……

・全員幸せになれたのかもしれない。

気付くのが、遅かった。

遅い所為で、私は自分も帽子屋様も傷つけた。

公爵夫人。貴方の事、嫌いじゃなかったよ。

今からそっちに逝くから……。

N a t u r e d   r a t   s   s l e e p   〱お人好しの眠りネズミ

ドスツ!

眠りネズミの振り下ろした戦斧せんぶが地面に突き刺さった。

チエシヤ猫は後ろに退き、小さく笑みを浮かべる。

「俺も、行くよっ」

鉄の鉤爪をヤマネに向け、走る。

地面に突き刺さった戦斧を一瞬の内に引き抜き、ヤマネはチエシヤ猫に向かって薙なぎ払う。攻撃を避けるべく、チエシヤ猫は宙返りをした。そして、上から突き刺すように迫る。

だが、それはあっさりと戦斧に止められ、圧された形で引き下がった。

「そんな小さい体のどこに馬鹿力があるのかねっ!」

引き下がった力を利用し、バネのように地面を蹴ってチエシヤ猫は加速する。目の前にまで迫って来たチエシヤ猫に、戦斧の刃を薙ぎ払っても間に合わない。ヤマネは少しでも直撃を避ける為に急いで後ずさる。それでも、ヤマネの腹に深くは無いものの、大きい切り傷を作った。

「っ……!!」

「あり?意外と浅いな。次はもっと深く傷を作ってあげるよ」

「逆にやってやるっての!」

痛みに負けじと、ヤマネは戦斧を振り上げ、そして振り下ろす。

何の工夫も無い攻撃にチエシヤ猫はあっさりと避ける。・・・一方的に、ヤマネがやられている。

やっぱり、チエシヤ猫と戦うのは難しいな・・・。

「チツ・・・」

なるべくチエシヤ猫から距離を取る為に、ヤマネは後退した。それを追いかける形でチエシヤ猫は迫る。

「無駄だよ。俺から逃げられると思ったたら大間違いっ」

速さもチエシヤ猫の方が優れており、すぐに追いつかれた。鉤爪の刃がヤマネの体に迫り来る。避けようとして速さを上げようとするが、チエシヤ猫に腕を掴まれ、引き寄せられた。

「離せっ！」

戦斧でチエシヤ猫の手を離そうと薙ぎ払う。避けようとチエシヤ猫は地面を蹴り上げるが、戦斧がチエシヤ猫の腹に当たるのが早く、大きな切り傷を作った。ヤマネと同じ、そう深い傷では無い。

一瞬表情を歪めたものの、チエシヤ猫はすぐに立ち直って距離を取る。

「・・・どうして、わざと当たった？」

「何の事かな？俺にはさっぱりだよ。俺は本気で戦ってるよ、君と嘘だな。俺を殺すのを躊躇ためらった。始めは殺すつもりでいたくせにな」

「あははっ。やっぱりバレバレだった？」

戦いの構えを解き、チエシヤ猫は鉤爪を装備した自分の手を見つめる。その様子を見て、ヤマネも戦斧を降ろし、戦いの構えを解いた。

「嘘が下手くそですよ、貴方は。小生に見破られるぐらいじゃ、ね」

「そつかあ。そりゃ、修行しないといけないね」

「チエシヤ猫には無理ですね。一生」

「それは嫌かも」

さつきまでの戦いはどこへやら。まるで、友達のように話をしている。・・・まあ、ヤマネは無表情に近いが。

「・・・一角獣ユニコーンに脅されでもしましたか？」

「よく知ってるね。さすが、芋虫の奴隷ってどこ？まあ、その通りだよ。本当は君の事殺しちやおうかと思っただけど・・・やっぱりさ、こういうの、嫌だから。それに白ウサギなら判ってくれると思って」

苦笑するチエシヤ猫。・・・やはり、どこか不安なのだろう。真実を知られる事が。

やはり、貴方は判りやすいです・・・。

目を閉じ、ヤマネは呼吸を整えた。

そして、ゆっくりと目を開ける。戦斧の柄を折りたたみ、ケープの中にしまった。もう、戦う必要は無くなったのだから。

「小生は戦う必要が無くなりました。今からアリスを見つけに行きます。ユニコーンに何をされるか判りませんから。貴方はどうしますか？」

「そうだね。しばらくポーっと傷が癒えるのを待とうかな」

「そうですね。自由にしてくれて構いませんが、邪魔をすれば小生は貴方を殺す事になります。この命を使っても……。それでは、失礼します」

一礼し、ヤマネはさっさと去って行った。

残されたチエシヤ猫はその場に座り込み、空を見上げる。暖かな日差しが、チエシヤ猫の腹の傷を癒しているようだった。

「ヤマネも甘いよねえ。この傷、戦斧で切った割には、浅すぎだよ。それに、今殺しとけば楽だったろうに……」

傷を撫で、チエシヤ猫は思う。

どうして、俺の周りにはこんなにも優しい奴が多いのかな……。

沢山沢山迷惑をかけて……。俺は、ただの馬鹿なのにさ。

逆に、こっちが申し訳ないじゃないか。

いつそ嫌ってくれれば楽だよ……。

「お人好し、だなあ……」

チエシヤ猫は静かに、一人で空を見つめ続ける。

Way to go correct? 進む道は正しいか??

「アリス。何を気持ち悪がっているんだ？」

淡々とした三月ウサギの声。

手には血塗れの短剣とまだ、一角獣ユニコーンを縛り付けている鞭。

そんな光景に、吐き気がアリスを襲う。  
胃に溜まったものが戻しそうな吐き気。

「っ・・・こんな、ものを・・・見たら・・・普通・・・」

「これは、お前もやる事だ。死体の1つや2つ・・・見慣れておけ。  
これは、いい機会だ。目を逸らすなよ」

「？」

何をするつもりだと言おうとしたが、気持ち悪さで声が出ない。  
そんなアリスは無視をして、三月ウサギは血塗れの短剣を死体と  
なったユニコーンに突き立てた。

「やめっ・・・!!」

グシャッ　グチャッ　グシャッ　グジュアッ　グチャッ

「うっ!?!?ぐあ・・・うっえ・・・あえ・・・っあ・・・」

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い!!!

判らない判らない判らない判らない判らない・・・!!!!

なぜ?どうして?

こんな事をする??

目の前の死体は、目玉を抉られ、腹を切られ、足を落とされ、爪を剥がされ……  
生きていた時の美しさは消え去った。

アリスはとつさに目を離すが、三月ウサギはそんなユニコーンの姿を見て、顔色一つ変えない。すまし顔で、静かに死体を見つめている。

「……目を、逸らすなと言ったよな？」

体が、震え上がった。三月ウサギが1歩と近付くたび、恐怖が体を支配する。足が竦<sup>すく</sup>み、まるで、金縛りのように動けない。

そして、三月ウサギが目の前にまで来た。

アリスの髪を強引に掴み、無理矢理引っ張って死体の方に目をいかせた。

「っ……!!!!」

「ちゃんと、見る」

「逃げたくても、逃げられない。」

怖い。

恐怖心が、全てを支配する。

アリスの体を。

アリスの心を。

アリスの世界を。

「怖いか？死体コレが」  
「……」

吐き気を抑えるのでいっぱいいっぱい……手足を動かすどころか、口も動かない。

すると、掴んでいたアリスの髪を離し、三月ウサギは見下すようにアリスを睨み付けた。

「自分の目的を忘れるな」

俺の、目的……。

黒ウサギを殺して、自分の居場所を作る事。

居場所が、ほしい……。

でも……

それだけで、俺は人を殺せるのか？

そもそも、俺のする事は正しいのか？

沈黙。

重い空気が漂っていた。

『そこにいるのは、三月ウサギとアリスですか？』

「!?!?」

突然、ヤマネの声が聞こえてきた。前に、三月ウサギが使ったスキルと同じものだ。

「ヤマネ、か。思った以上に早いな」

『それは、予想していたと言う事ですね。それを、知っていながら

教えなかった・・・と。まあ、そんな事はどうでもいいです。アリスに手出しはしてませんか？」

「していたら、今すぐヤマネが帽子屋が飛んできて俺を殺そうとするだろ？」

『はい』

悪魔で冷静に会話をしている。戸惑う事も、焦る事も無い。ただの会話。

アリスはその会話は殆ど耳に入っていなかった。ぐるぐると脳に巡り続ける疑問。恐怖の支配から逃れ、自分の疑問を考えるのに支配されてしまった。

『今から小生はそちらに行きます。出来れば、去って頂きたい』

「・・・ああ、判ったよ。ついでに、死体処理もよろしく」

『・・・判りました』

ヤマネの声が消え、三月ウサギは息を吐く。

そして、呆然としているアリスを横目で見ると、すぐにその場から去って行った。声を掛けても無駄だと悟ったのだらう。

三月ウサギが去っても、アリスは自分の疑問に支配され続ける。

俺のやる事は正しいのか？

俺は・・・

自分の道を進んでいるのか？

・  
・  
・  
・  
・

早く、アリスの下へ行かなければ・・・。

ヤマネは珍しく少し焦っていた。アリスを先に帽子屋達に見つけ

られてはいけない。早く、自分が見つけなければ。  
そして、黒ウサギの下へ案内しなくては……。

「　　」

どこからか、歌声が聞こえてきた。

優しい声の、歌声。

自然と足が止まり、歌声の聞こえる方へと歩く。……アリスの

下へ行かなければいけないのに……。

進んだ先は、美しい瑠璃色の湖。

そこで、少女が歌っていた。

Rose thorn 薔薇の花の棘

迷いの森。

その名の通り、入り込めば迷って一生出られないとも言われている。実際、森の深くまで行かなければ、それとチエシヤ猫のいじめおよび、悪戯が無ければ普通に出られる。  
で。

現在、実際に迷いの森で迷っている者が2名。

帽子屋、白ウサギ。

「ねえねえ、帽子屋さん。もしかして、僕達迷ってる？と言っか、迷ってるよね？」

「・・・」

「帽子屋さんがプライド高いのは知ってるけどさ。これは認めよう。うん」

死刑執行人を倒し（気絶させ）、現在はアリスを探すべく歩いている帽子屋と白ウサギだが、生憎2人は通信系スキルを持っていない。通信系スキルを持っていれば、アリスを探し出す事が可能だ。勿論、通信する事も可能。その場所を辿れば通信している場所に行けると言っ訳だ。まあ、使えないならば、どうにもならないが。迷いの森とあらば尚更。

「あーあ、死刑執行人連れてくるべきだったかな？確か、通信系スキル使えるんだよね」

「もう1人のウサギはどうなんだ？」

ぴくりと白ウサギの耳が反応した。さすが動物の耳とも言うべきものだろうか。ウサギ耳が驚いたように一瞬だけ耳が立った。

「……白ウサギ？ね。多分、無理。僕は回復系スキルしか使えないし。白ウサギは攻撃系スキルしか出来ないと思うよ。僕等は双子だもん」

「……」

「本当は、双子だつたんだ。でも色々あって、白ウサギが体の中にいるんだよ。昔から。簡単に言うと、もう1人の僕は白ウサギの役目を果たす為の人格だと思ってる。本当は違っても、僕がそう思ってるからさ」

2人で1人。それを、白ウサギ自身は認めている。認め合っている。だからか、血が結晶化したと言う異常現象の事を何も聞いてこない。

もう1人が何もしていないと言う事はその内なんとかなる。とでも思っているのだろう。それか……

自分の体にもう1つの人格がいる事のほうが異常なのかもしれない。……白ウサギにとっては。

「……あれ？」

「どうかしたか」

「血の香りがする……。多分、僕等みたいな動物系じゃないと判らないと思う」

血の香りと言う事はどこかで戦いがあり、その戦った人物の血。もしくは、誰かが血を流して死んだ。恐らく、このどちらかだろう。

「そこに、アリスがいる可能性があるな」

「うん……。こっち、だよ」

内心では、アリスがそこにいなければいいと思っている。

まだ、知ってほしくない。人の死なんて知っても何の得も無い。ただ、自分が悲しくなるだけ……。

そして、自分に棘が出来る。薔薇の花のように、相手に美しいと思わせ、近づける。最後には、棘で傷つける。

アリスに醜い棘なんて持ってほしくない。チェシャ猫のように、狂ってほしくない。

「アリスっ……」

帽子屋と白ウサギはアリスの下へと、走る。

・  
・  
・  
・  
・

ハートの女王の城。薔薇園。

朝から女王は、お茶をし続けていた。そして、その女王の下に客人が、1人。

「ハートの女王よ。汝はどう思っている？今回のアリスを」

「そうね……。いままでのアリスの中で、一番いい子？だと思  
うわ」

「くくくくっ……。そうだなあ」

扇子で笑う顔を隠しながら、芋虫はお茶用のクッキーを摘む。

「今日は長々とお茶をしているようだな。このクッキー湿気ているぞ？これからもう1人客人が来るのならば変えておくといい」

「それはそれは。でも、後から来る客人はお菓子には興味を持たないの」

「ほう……。それは、三月ウサギの事か。汝の駒の1つ……」

一瞬、女王の眉が反応した。それを見逃さず、芋虫は女王の言葉を待っている。何が違つのかと、問うように。

女王は息を吐き出し、薔薇を一本摘んだ。鼻に近付け、薔薇の香りを感じている。

「美しい薔薇には棘がある。それと同じ、三月ウサギを甘く見ていたら棘が刺さりますよ。貴方の心臓に、ね……」

忠告をしているかのようにだった。女王は薔薇の花を一枚一枚と干切り、地面へ落としている。そして、すぐに薔薇の花びらは消え去った。全て、地面へ落ちた。

「……なるほど、な。忠告を感謝しよう。三月ウサギが汝に従うのは、ただの花びらと言う訳か。飾りだな。後は棘……とでも言っておこうか」

「ええ。貴方は察しがよくて助かるわ。まあ……私に忠誠を誓う者など数える程しかいませんが」

微笑みながら、女王は紅茶を飲む。冷め切った紅茶を。それは温ぬるくて、美味しいものではない。だが、女王はその味に何を言うのもなく、純粹に楽しんだ。

今は温いぐらいが丁度いい……。

冷たくも無く、熱くも無い。

今は温くなくてはいけない。

まだ、アリスは真実に近づけてはいけない。

これを知った時、アリスは……

「芋虫。貴方には助かったわ。報酬は、置いておいたわ。そこにオマケもいるけど・・・好きにしていいわ」

「判った。私の用は済んだ。そろそろ失礼しよう」

扇子を閉じ、芋虫は強風と共に消え去った。

「棘・・・ね」

女王は、不気味な笑みを浮かべ、じつくりと紅茶を楽しむ。

体が、動かない……。

どれぐらい時間が過ぎたのでしょうか……。

早く、行かなくては……。

女王様が待っている。

白ウサギを処刑して……期待に応えないといけないのだから……。

起き上がらないと……。

「まだ、起き上がらぬ方が良いと思うぞ？」

だ、れ……？

「まだ、体が動かぬのだろうか？強く打たれたようだからもう。未だに麻痺しているとは。さすが、帽子屋だのう」

笑っている……。

この笑い方は、芋虫……。

なんで、ここに……。

女王様の所へ行つたのでは無いの……？

「報酬とオマケを我は女王から貰った。この意味、判るか？」

報酬と、オマケ……？

オマケ？

オマケ？

オマケ？

．．．私？

「くくくくつ．．．。今日から我の人形だのう。死刑執行人」

ああ、私は見捨てられたんだ．．．。

現女王は、私を見捨てたんだ．．．。

馬鹿馬鹿しい．．．。

判っていた事なのですから。いつかは、捨てられると判っていた．．．。

でも、とても．．．

「まあ、汝は所詮捨てられたガラクタダがな。せいぜいもがくとい  
い。我の駒として、な

．．．

ああ、とても．．．

悲しい。

．．．

迷いの森、入り口。

現在、三月ウサギは迷いの森の入り口にいた。

「．．．女王、聞こえますか」

『ええ、聞こえているわ』

どうやら通信をしているようで、独り言を呟くように、女王と話

をしている。勿論、三月ウサギは感情の籠っていない声で、淡々と。

「一角獣は無事始末しました」  
『ご苦労様』

「それと、黒ウサギが森に来ているそうです。歌を歌っていましたよ」

『・・・そうなの』

どこか女王は楽しんでいるかのようだった。

女王にとっては、全て滑稽なゲーム。  
ワンダーランド

不思議の国はチェスボード。

住人達はチェスの駒。

黒ウサギとアリスが王。  
キング

そして、女王はチェスを動かして遊ぶ子供。

気分だけで駒は変わる。捨てられる。全ては女王の掌の上。

糸で操られた運命のゲームボードの上で、住人達は何も知らずに踊り続ける。見えぬ運命の束縛糸に気付かずに。ただただ、踊り続ける。

住人達は運命を変えられない。運命を変えられるのは・・・

アリスだけ。

「・・・全て、女王の掌の上と置いていたら、死にますよ？」

『そう、ね。でも、私が死ぬ事になったとしても、最後まで楽しめればいいわ。退屈しない、日が死ぬ寸前まであれば』

「そうですか」

『・・・本当、アリスは不思議ね。動きが予想できない。そう思うでしょう？三月ウサギ。いえ・・・アリス？』

一瞬、時が止まったように感じた。アリスと言う一言によって。

「・・・それでは、俺はまだ迷いの森（こもり）にいるつもりなので。お茶会には行きません。早く、終わりにしてください」

一方的に通信を切り、三月ウサギは唇を噛み締める。何かに、耐えるように。

どこまで調べたんだ、クソガキ・・・。

知られる事は時間の問題だと判っていたが、こんなにも早くか・・・。

早く手を打たないと、負ける・・・。

悔しそつに青空を見上げた後、三月ウサギは森の奥へ歩き出す。

アリス達の様子を監視する為に。

次の手を打つ為に。

「俺は、負けられないんだよ・・・!」

今日の三月ウサギ（かれ）は、とても焦っているように見えた。



戦斧を出して戦おうと・・・

「戦う気なんて、無いよ」

足を止め、歌の音源の人物が口を開いた。

「・・・それを、簡単に信用しろと。滑稽こっけいな話です。ここは、不思議フシの国ですよ？死なないとはいえ、痛みで寿命が縮む事もありますからね」

姿を見せぬまま、ヤマネは話す。ここで逃げれば、確認が出来ない。かと言って今出れば、不意打ちをくらうかもしれない。

「・・・さっきの歌は、なんですか？」

「あの子？が作った歌。これを歌えば、起きてくれると思って・・・」

あの子？

起きてくれる？

眠っていると言う事か・・・？

「貴方は誰ですか？」

「・・・だよ」

「!?!?」

急いで顔を確認しようとする木の陰から出ようとした・・・が、

「おようなら」

突然の強風と共に消え去ってしまった。ヤマネが確認する前に、気配はもう感じない。舌打ちをし、ヤマネは自分の役目を思い出した。

アリスを黒ウサギの居場所へ案内する。

ヤマネはすぐに通信スキルでアリスを探しながら、走り出す。

もしも、さっきのが                    だとすれば・・・

芋虫の情報が間違っている・・・？

そんな馬鹿なっ・・・。

「っ・・・行けば判るっ」

混乱する考えを捨てるように、ヤマネは言い切った。

・  
・  
・  
・  
・

真っ暗の部屋。

キラリと銀色の刃が光った。

「もう、こんな近くに、偽アリス？がいたんだ・・・。早く、消さなきゃいけない。あの子が、悲しむ・・・」

銀の刃を見つめ、少女は柄を握り締める。何かを決意するように。

あの子は絶対に悲しませない。

あの子を悲しませるものは全部全部壊してやるっ。

偽アリスはいつもあの子に涙を流させるからっ・・・壊してやるっ。  
っ。

「壊してやるっ！消してやるっ！殺してやるっ！」

少女は銀の刃を振り上げ、真つ暗な床へ振り下ろした。自分の中に渦巻く本当の感情を打ち消すために。無意味だと判っていないながら  
キーン……

刃が床に少し突き刺さった。だが、相変わらず部屋は黒くて、どこにもヒビが入っていない。もしかしたら入っているのかもしれないが、それは暗さで判らない。

「ううっ……」

柄を握る手の力を緩め、崩れ落ちる。

本当は誰も殺したくない。

あの子だってそれを望んでる。

なのに……

戦わないと、殺される……

どうしてこうなった？

いつから狂ってしまった？

ああ、

涙が止まらない……。

「どうしたらっ……いいのっ……？」

問いに答える者はいない。

1人、沼の中に沈んでいくだけ。もがいても、もがいても沈んでいく。だから、もがく手を止めた。

沈むだけなら、もがかなければいい。

誰の手も伸びてこないのだから。

このまま、静かに吞まれてしまえばいい……。

歪み？ワンダーランドがこの世界を滅ぼすまで……。

静かに、でも確実に。

沈んでいく。

C r a z y A l i c e 　↳狂うアリス

誰かが呼んでいる

誰を？

アリスを

なぜ呼ぶ？

殺す為

なぜ殺す？

邪魔だから

どこが邪魔？

存在自体が・・・

・  
・  
・  
・  
・  
・

「アリスっ。アリスっ。アリスっ！」

名前を呼ばれ、我に戻った。

呆然としていて、何も聞こえなかったし見えなかった。

そして、我に戻った今。やっと目の前にいるのが誰かが判った。

「帽子屋、白ウサギ・・・」

2人がいる事に安堵しかけたアリス。1人でいる時と、誰がいる時の差は大きい。

「アリス、大丈夫？どこか怪我ない？」

「ああ、怪我は無い。大丈夫・・・」

言葉が、止まってしまった。気付かなかったものが、見えてしまったのだ。

一角獣ユニコーンの死体。

「・・・アリス？」

白ウサギの声が届いている様子は無い。さっきと同じような状況だ。

三月ウサギが、殺した。

三月ウサギが、壊こぼした。

三月ウサギは、消こぼした。

そして、俺は・・・

見捨てた。

「うえっ・・・あ・・・うあっ・・・」

吐き気が、再び襲って来た。抑えられない程の、吐き気。

白ウサギや帽子屋が何か言っているようだったが、アリスの耳に



「うっ……」

殴られた事により、そのまま気を失ったアリス。崩れるように、帽子屋の腕の中へと倒れていった。

それをちゃんと帽子屋は受け止める。白ウサギは安堵し、胸を撫で下ろした。

「帽子屋さん。アリスは……」「大丈夫だ。気を失わせたただけだ」「そっ、か。……アリスは、死体を見てどう思ったのかな？」

「それは、アリス自身に聞け。俺が答える事は無い」

アリスを抱えたまま、帽子屋は歩き出した。

「俺の家に行くぞ。少し寝かせた方がいい」

「うん……」

死体を確認して、白ウサギも歩き出す。

死体は一角獣さん、か……。アリスを殺そうとして、誰かに殺された……。きつと女王様の命令だろうけど……。帽子屋さんは、どう思ってる？それとも、何とも思わないのかな？帽子屋さんにとって、ユニコーンさんはどんな存在だったのかな……。

美しさの欠片も残らないユニコーンの死体。それを見て、帽子屋はどう思ったのか。それは、帽子屋自身にしか判らない……。

血の香りが漂う迷いの森(一部)。

「一足遅かったようですね・・・」

死体のある、アリスが先ほどまでいた場所に、ヤマネはいた。  
現在いるのは死体だけ。アリスの姿は見当たらない。・・・帽子  
屋と白ウサギに先を越されたのだ。

あんな場所で、時間を使ってしまったのが間違いでした・・・。

冷静に反省をしつつ、見下すように死体に目を移す。動揺などす  
る事なく、平然と。

誰が、一角獣ヨニコウを殺したのでしょうか・・・。

死刑執行人は帽子屋と白ウサギの相手をしていた。芋虫は何をし  
ていたか判らなくとも、自分の手で人を殺せる訳がない。ヤマネは  
チエシヤ猫と戦っていた。

チエシヤ猫？

チエシヤ猫ならば、ルールを無視できる。ヤマネが去った後、森  
を知り尽くしているチエシヤ猫なら、可能。もしくは・・・  
女王に命令された人物。

このどちらかと言う事でしょうか。嫌、もう一つ・・・

黒ウサギ。

「そんな馬鹿な事・・・」

黒ウサギと言う考えを捨てようと頭を振ったが、やはり消えない。だって、黒ウサギはヤマネの前にいたのだから。会話としたのだから。

『・・・黒ウサギ、だよ』

本当に黒ウサギだと言う事だったのでしょか・・・？  
ああ。本当、不思議の国に事件があると厄介です。

「・・・芋虫に、報告をしなくては」

息を吐いた後、ヤマネは死体を無視して歩き出す。芋虫の住処へ。

・  
・  
・  
・  
・  
・

芋虫の住処は、自分の嫌いな人を大好きだと言うちょっと（かなり）変わった呪文で扉が開く。何でも、帽子屋への嫌がらせらしい。相当帽子屋の事を嫌っているのだろうか？

だが、芋虫は正確な情報を与える。自分を殺そうとしている者でも、対価に見合う何かを提供すれば、何でも調べてくれる。勿論、裏切るような事があれば、ヤマネを殺す。

それが、常識。見合うものが無ければ、ただ働き。それは芋虫にとって侮辱と同じ。違う言い方では、嘗められている。何も出来ないと思われているようで・・・。

それが、芋虫なのだ。

「戻りました。芋虫」

「ご苦労な事だったのう。今日は、新しい駒がいるから・・・歓迎をしてやれ。我は少し出掛けてくる」

「承知しました」

新しい駒・・・？

新しい駒とは誰の事かと考えている内に、芋虫は行ってしまった。息を吐くと、ヤマネは本棚に並ぶ本を1冊手に取る。

すると、本棚が動き出し、地下へと続く通路が現れた。よく、アニメや漫画の隠し扉にでてきそうだ。

何の躊躇いも無く、ヤマネは地下へと降りていった。

薄暗いランタンの灯り。<sup>あか</sup>冷たいレンガの壁に、3つの扉。

真ん中は、芋虫の寝室。右は、牢。左は、現在はヤマネの寝室。

昔は、芋虫に付いていた者が使っていた部屋だった。

その3つの扉の中で、右にある牢の扉に手を掛けた。

ギイイイイイイ・・・

扉の先には、大きな檻。<sup>おり</sup>その隅には、鎖で繋がれた誰かが座っている。暗くて顔はよく見えない。

「名前を、名乗って下さい。小生は貴方に幾つか教えなさいいけな  
い事があります」

「・・・」

「名乗って下さい」

「・・・」

「名乗りなさい」

「・・・」

ずつと無言のまま、誰かは微動だにしない。屍のようにも見えない。ため息をつき、ヤマネはゆっくりと檻の扉に近付いた。

「貴方が誰かは判りませんが・・・ここから逃げたいですか？」

一瞬、ピクリと動いた。『逃げたい』その言葉に反応している。

「なら、始めは従いなさい。小生は逃げるつもりなどありませんが、貴方は逃げたいのでしょうか？なら、始めは芋虫に従う事です。そうすれば、外に出られる。その時に逃げればいい」

「・・・このまま、眠ってしまいたい」

初めて口を開いた。でも、その言葉は希望を失った絶望のようだった。

「逃げたい訳では、ありませんよ。私はただ・・・死にたい」

死にたい。

今。誰かは不思議の国ワンダーランドで死ぬ事を望んでいる。

どうして死にたいと思うのか？そんな事は聞かなくても、理由など色々と思いつく。

「・・・そう、ですか。小生はどちらでも構いません。また、後で着ます」

「・・・」

チラリと扉を閉める寸前に誰かを見たが、動く様子は無い。そのまま扉を閉め、ヤマネは自分の寝室へと向かった。

「死にたい。か・・・」

一言咳いて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2994x/>

---

Alice story 本当のアリスは誰？

2011年11月7日08時11分発行